A collective project aimed at distributing scans relating to archival fashion to the public - for free.

— archive-pdf.tumblr.com —
— Instagram: @archivepdf —

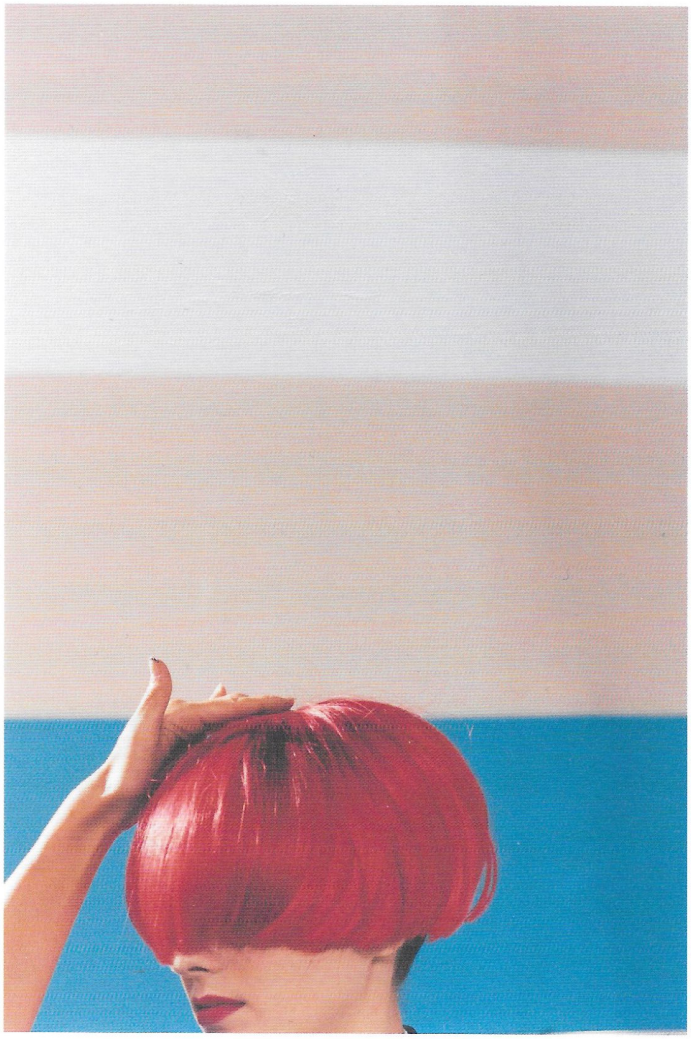
ARCHIVE.pdf
presents:

UNDERCOVER

Chaos / Balance

Book Provided by Ramon (@rn.rrr)
Full Scan by Casino Riv (@casino_riv)

U.S. $0.00 Can. $0.00 NON-FICTION
ISBN 678-0-307-26638-7
40788
6 78030 47228 S



Chaos / Balance

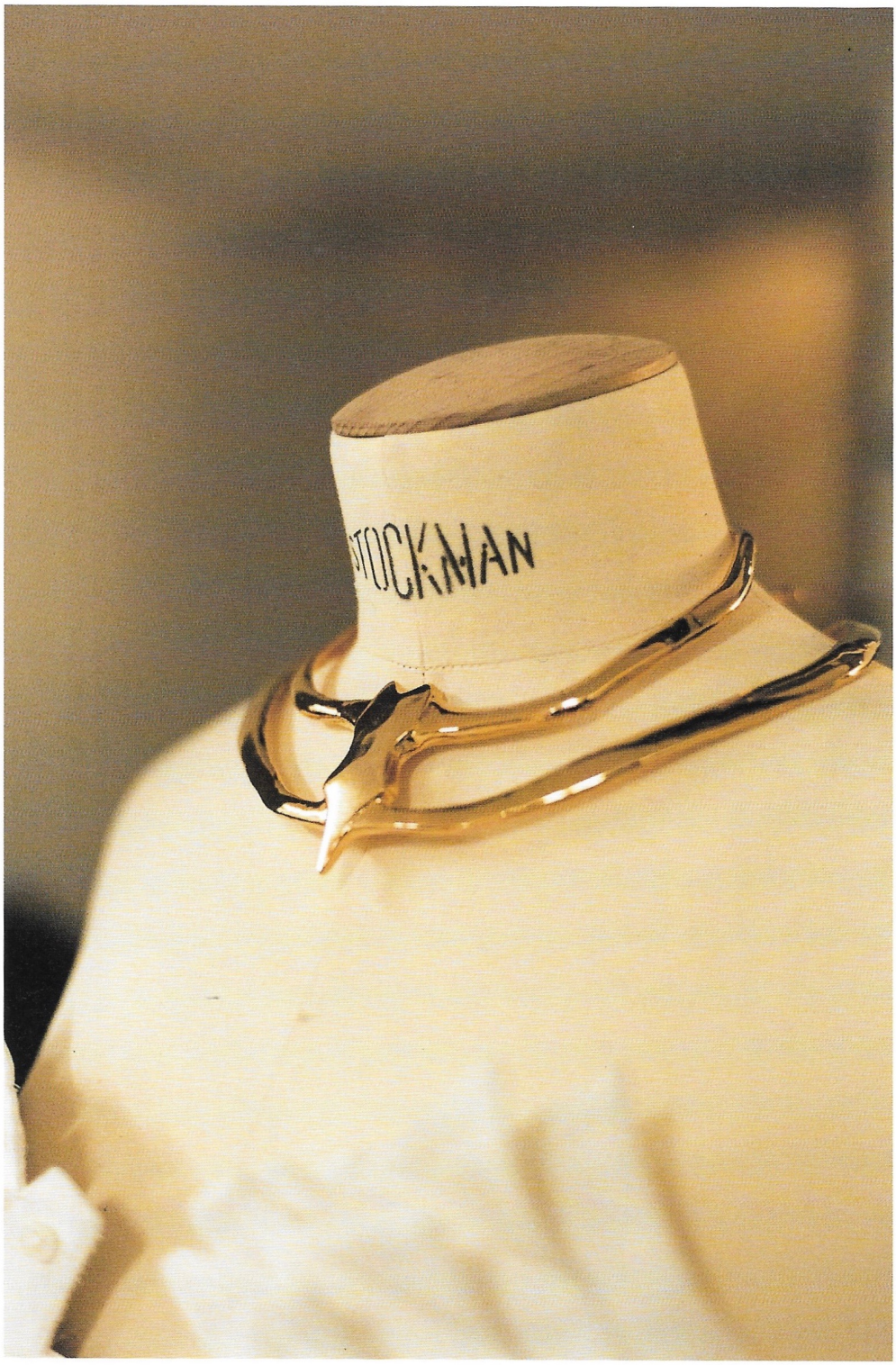
Taro Mizutani
UNDERCOVER

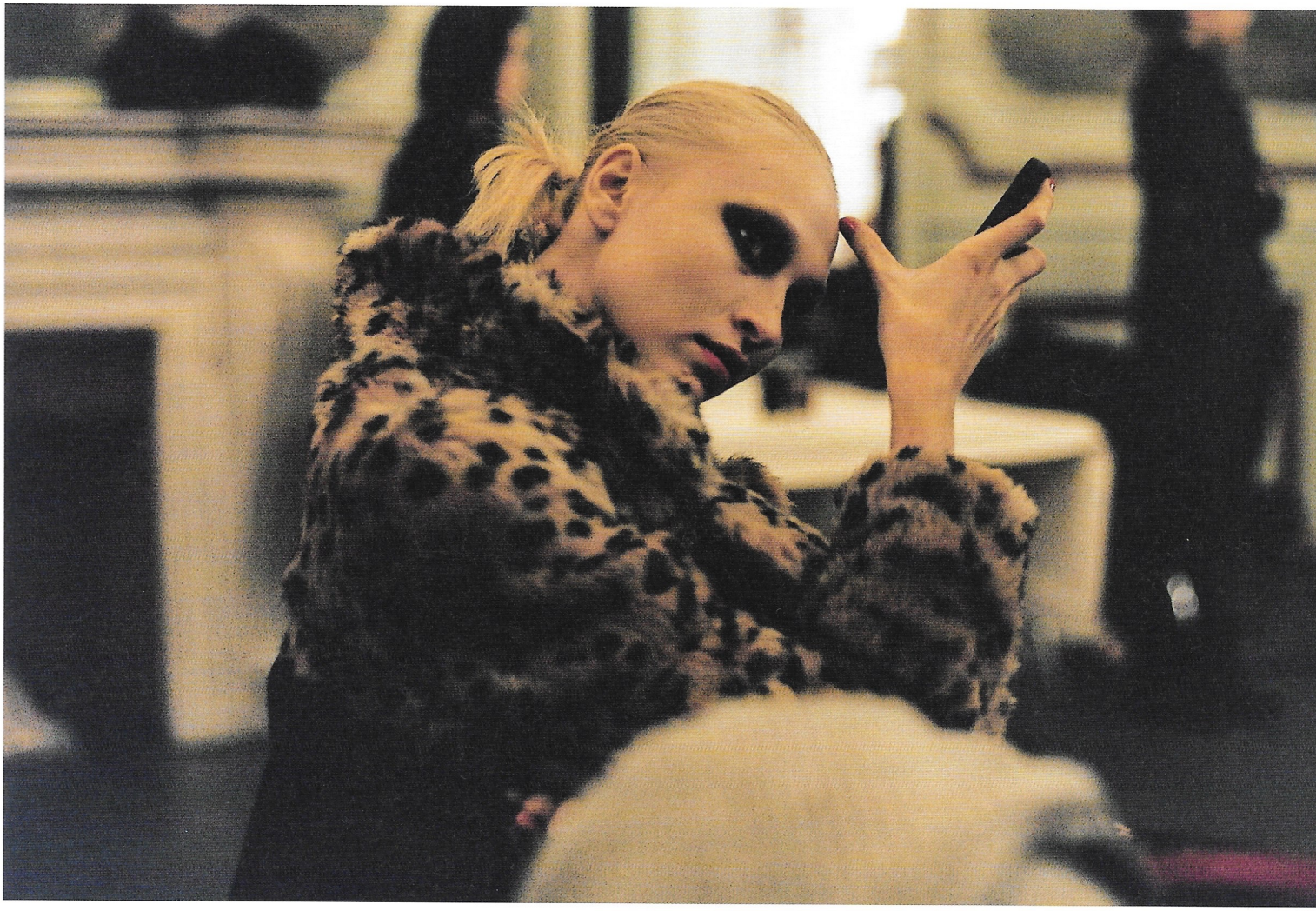
Chaos / Balance

Taro Mizutani
UNDERCOVER

2013-14 A/W "ANATOMICOUTURE"

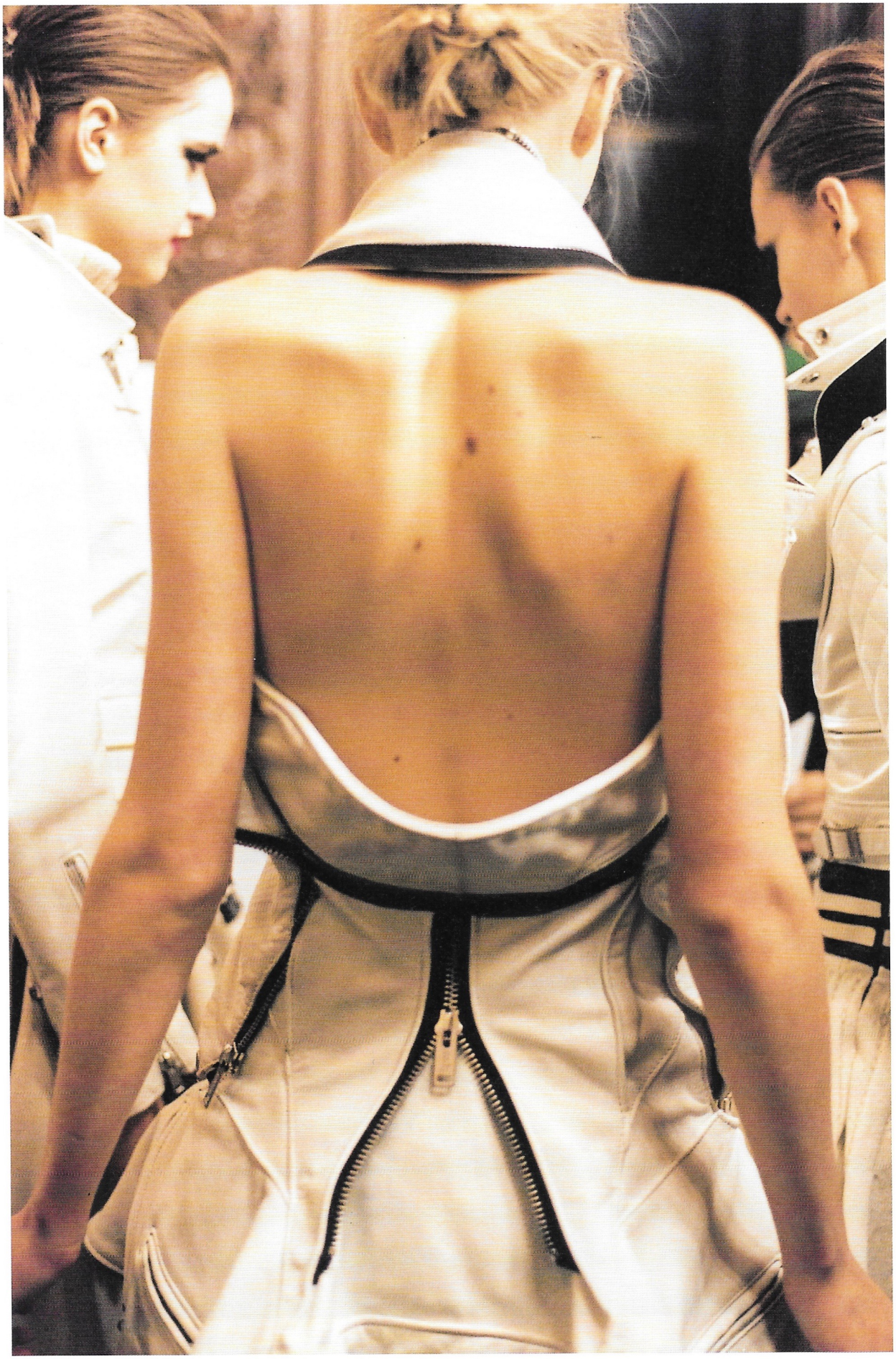
2013.2.24-2.27

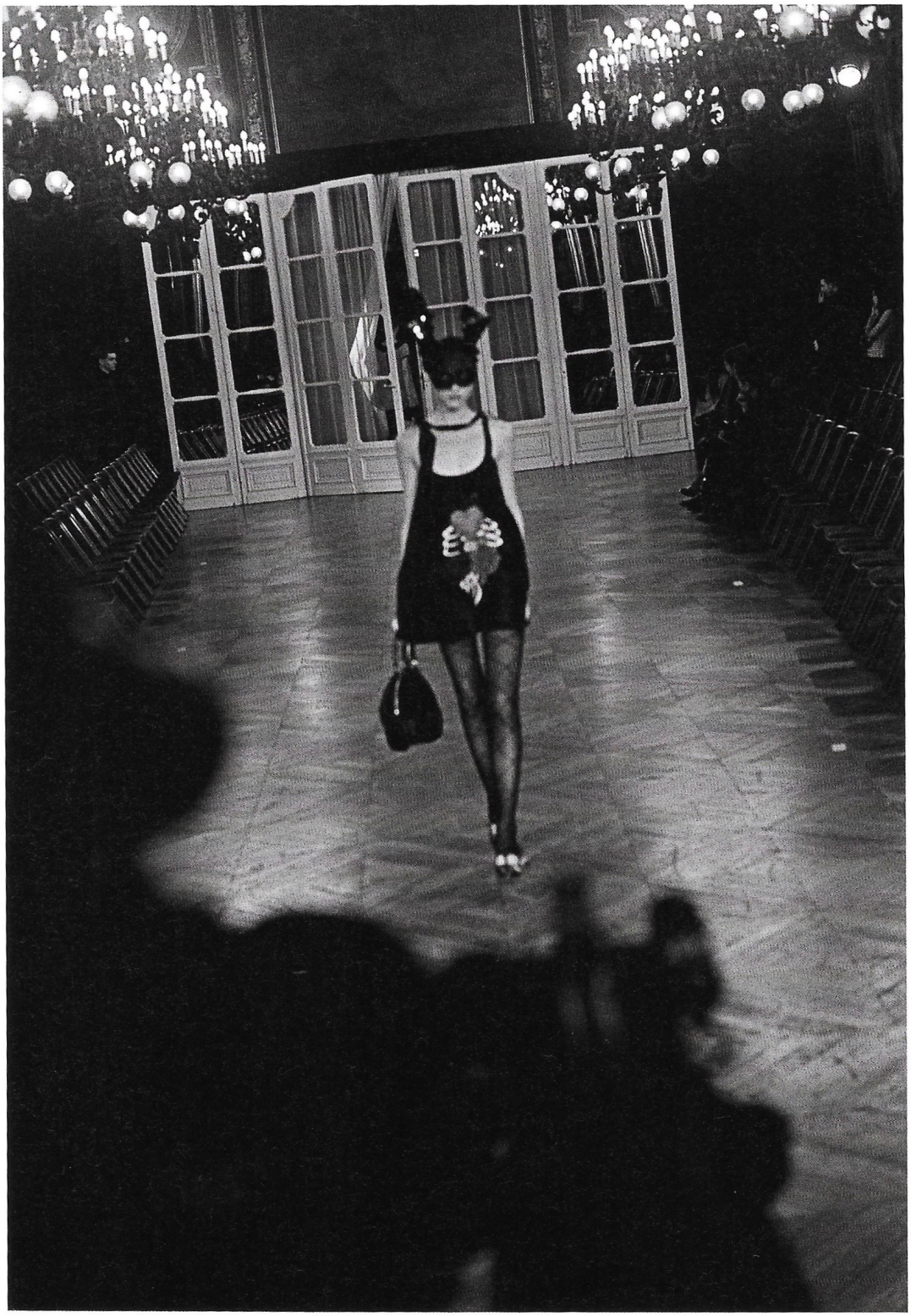

STOCKMAN



UNDERCOVER Co.,Ltd
8
9
5
12
1
21
4
TARE 112 KG
10 004435
10 004418

YULIA L.
Yulia L.
EDYTHE

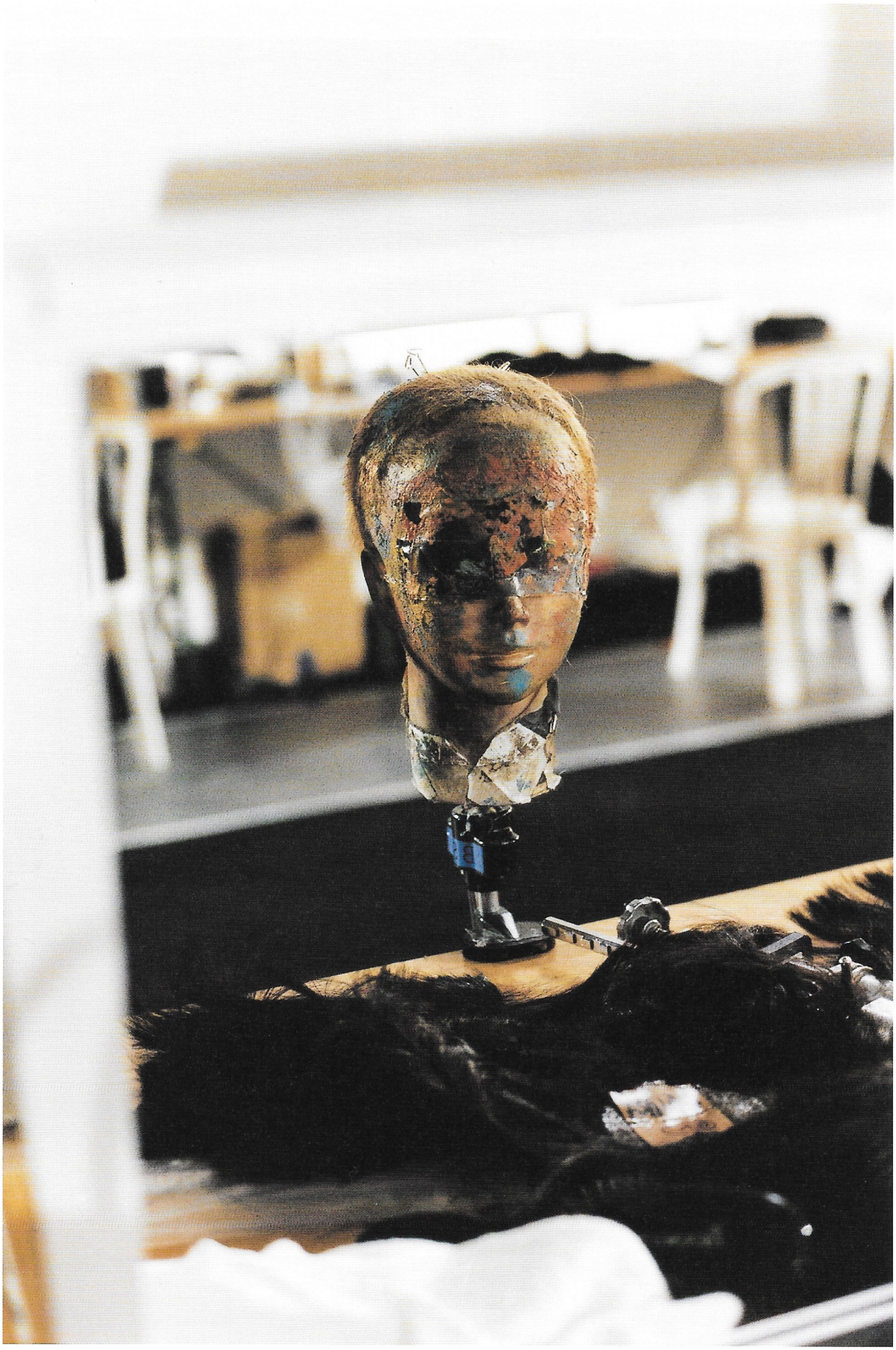


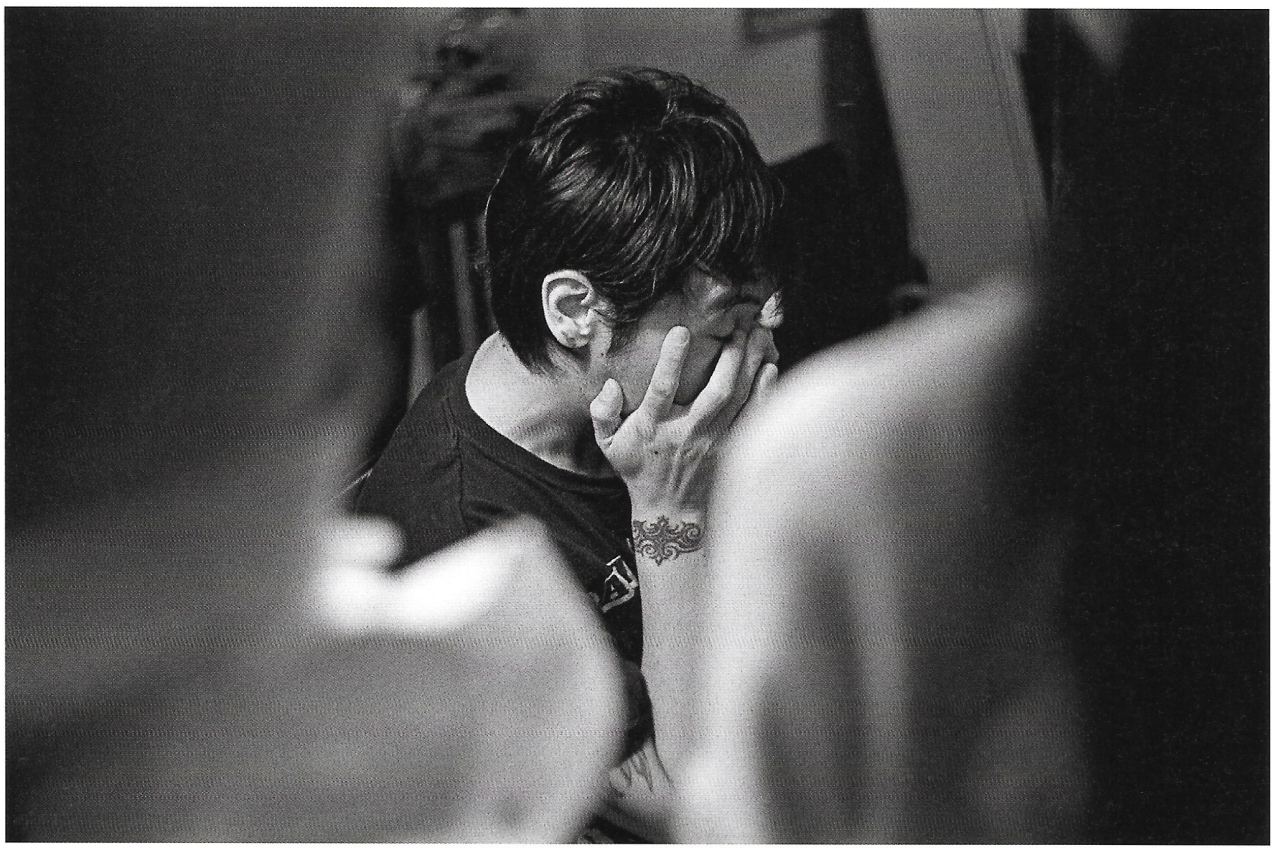


2014 S/S "GODOG"

2013.9.21 - 9.25

Chaos

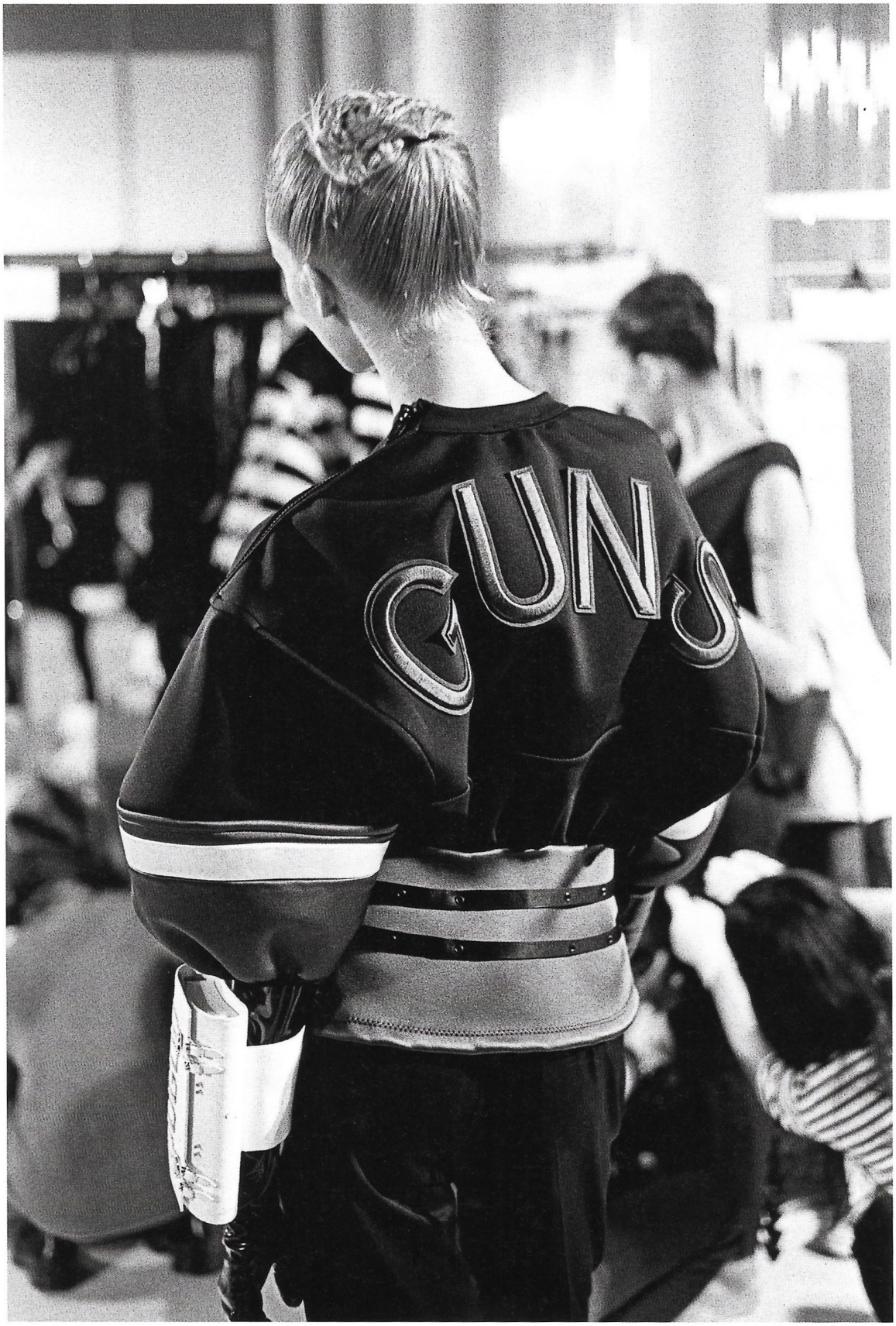


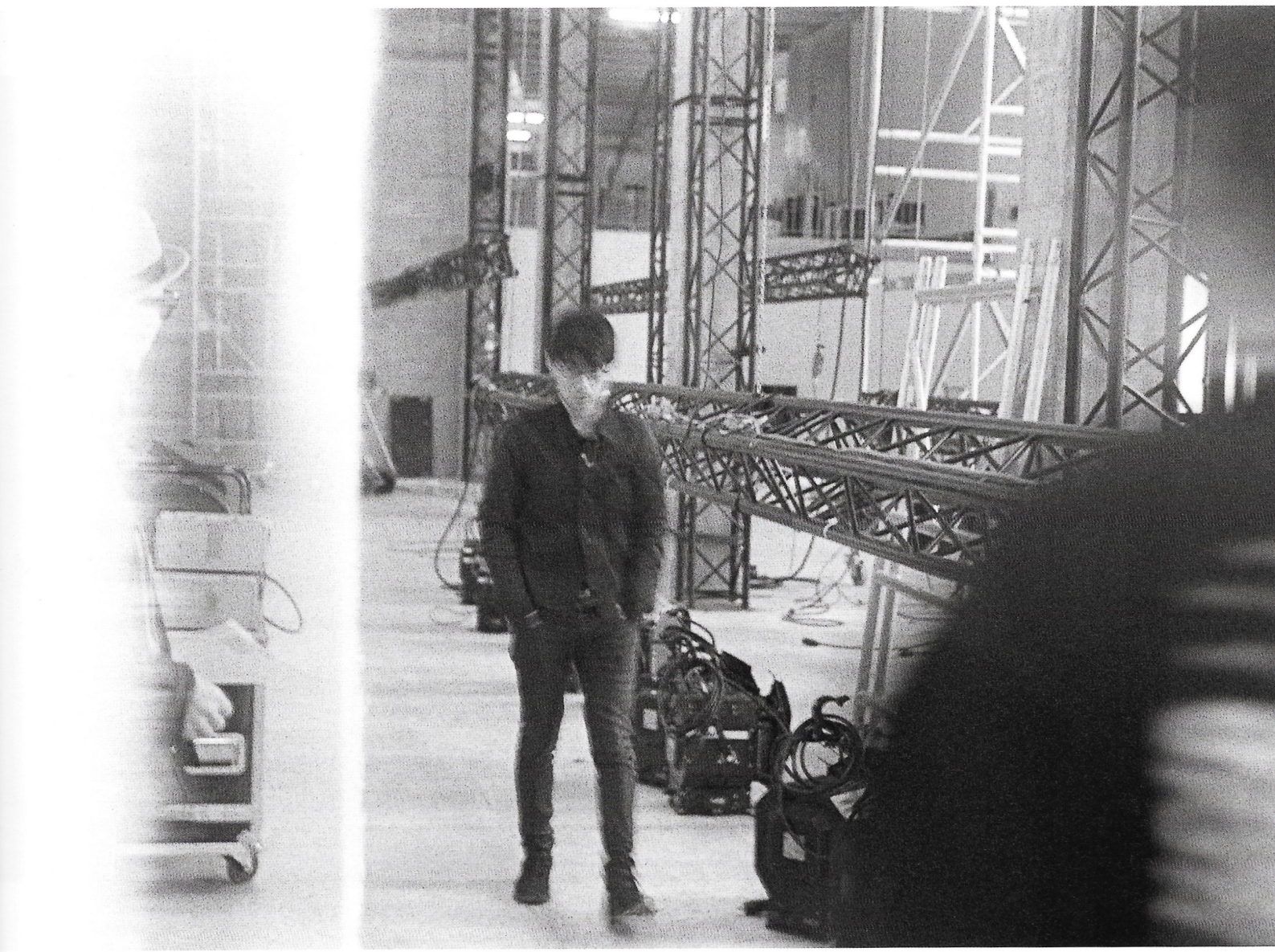


centre
international
de presse

DEMAND

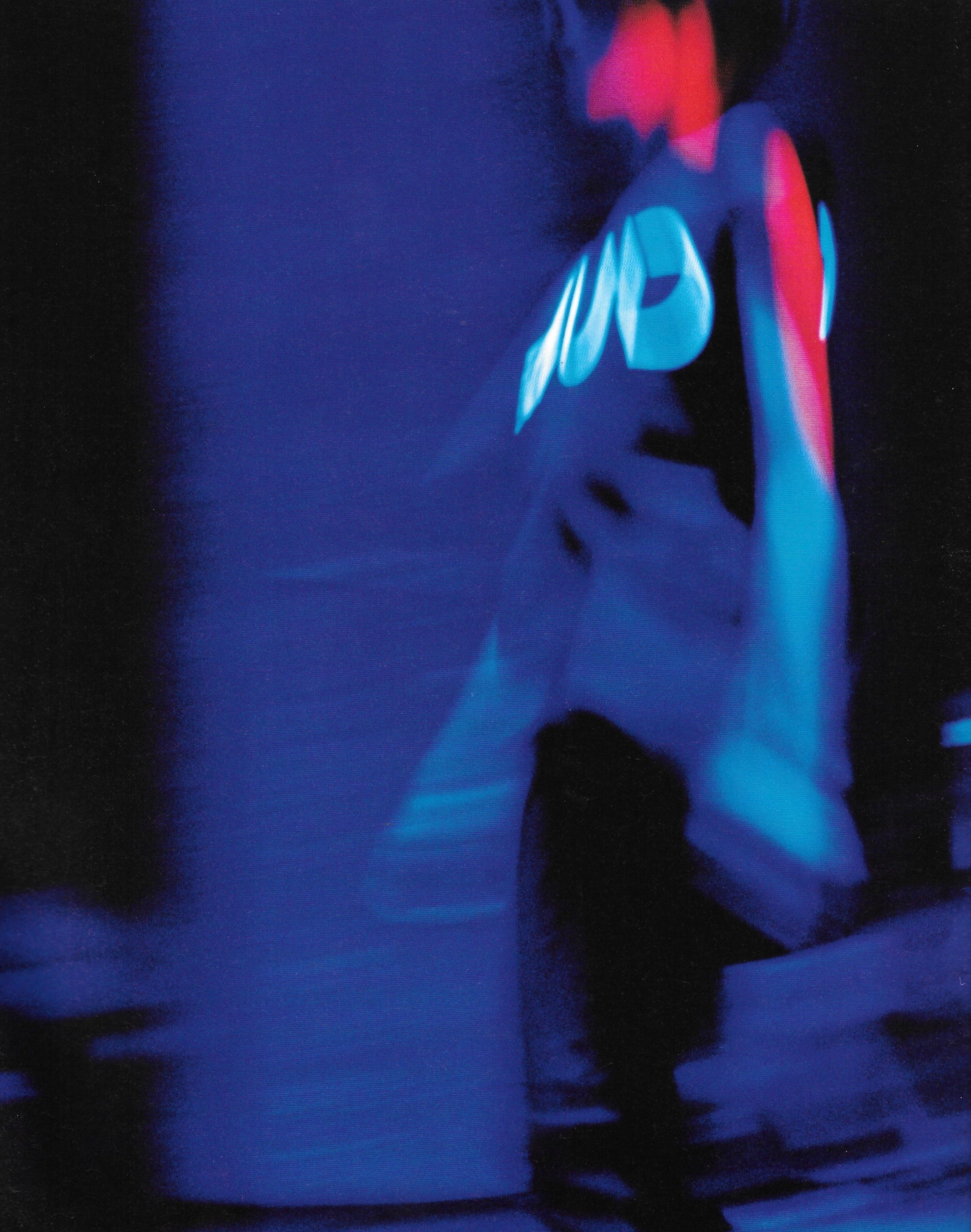
SOME
CANDY
TALKIN


GUNS



TIME
OF
RAGE

SOME
CANDY
TALKING

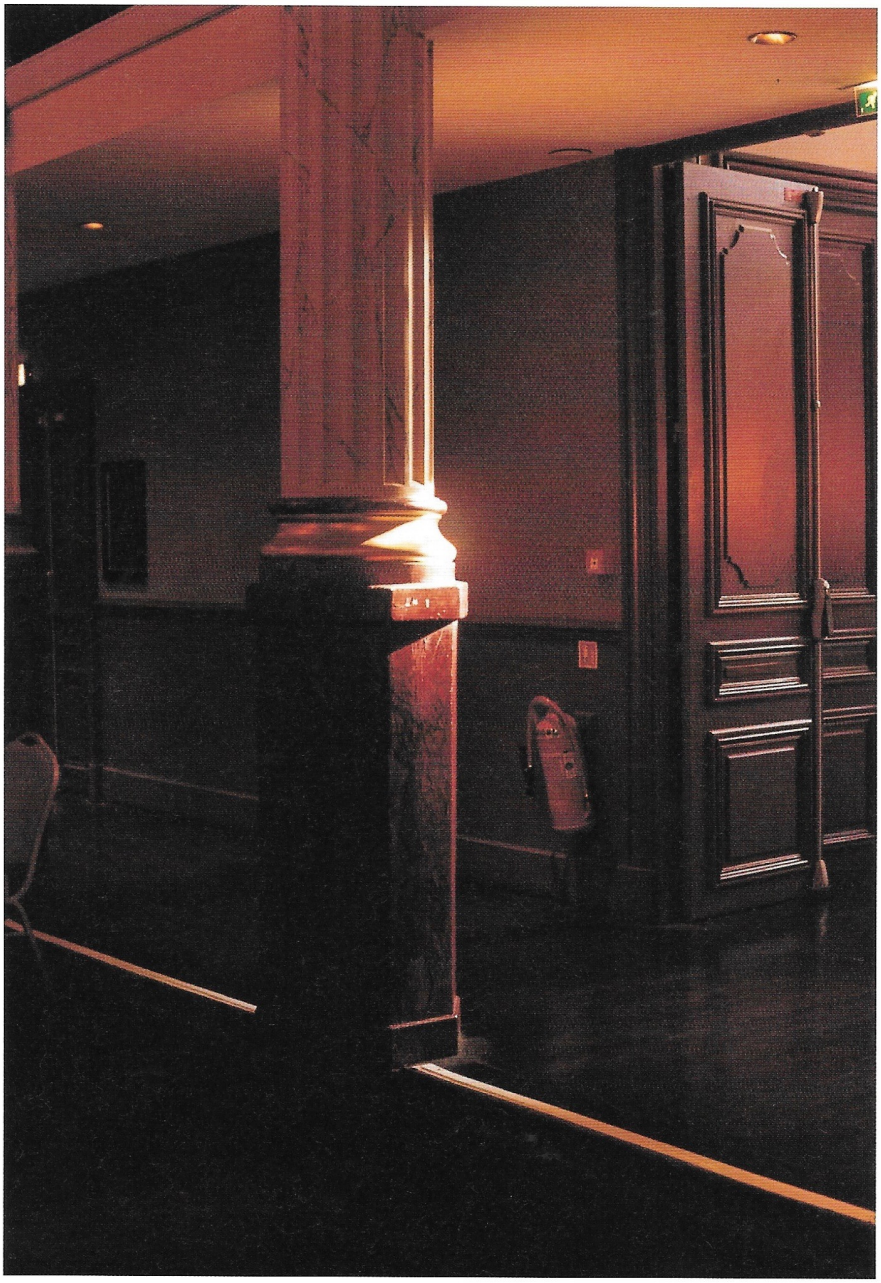


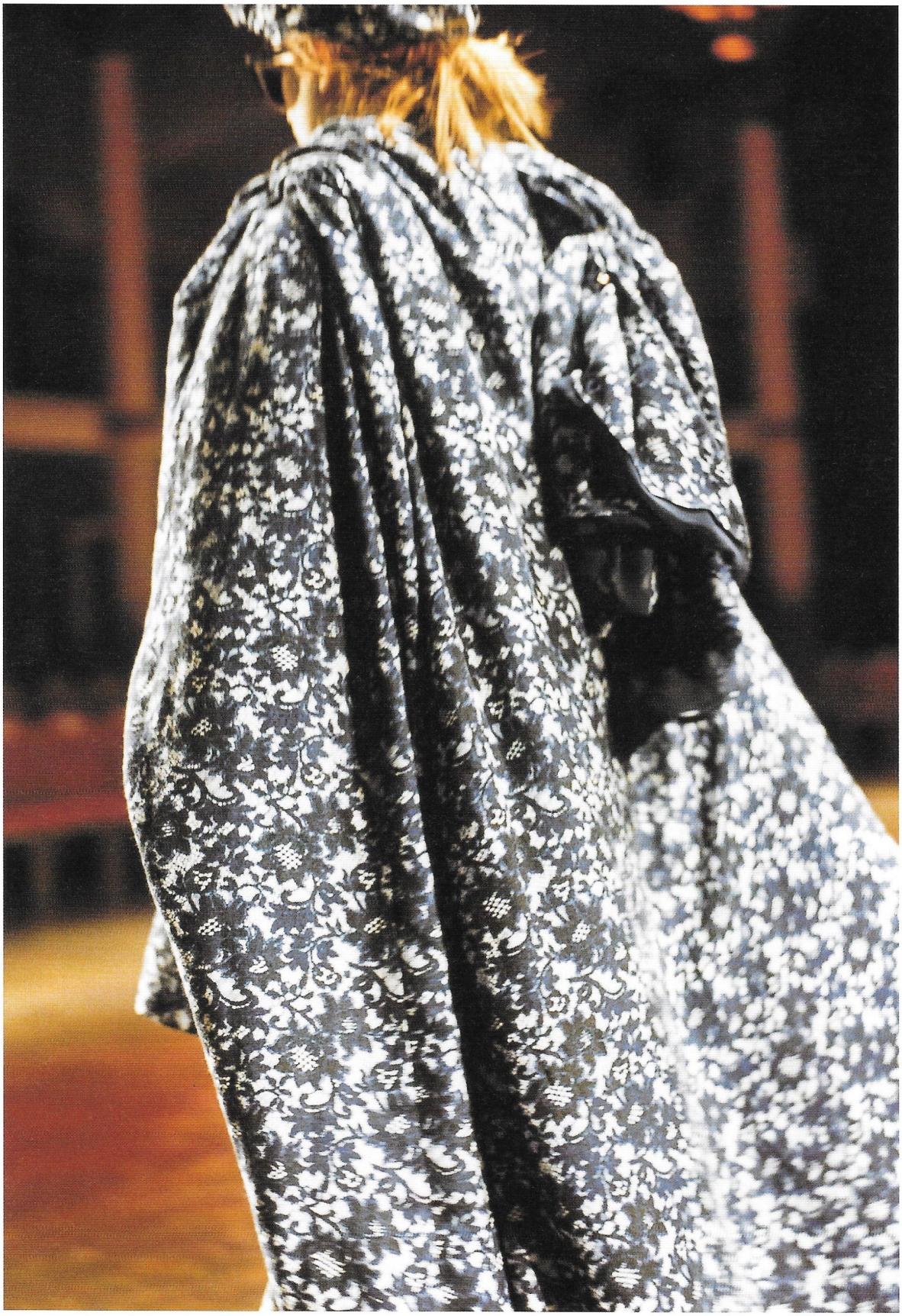
GUVS

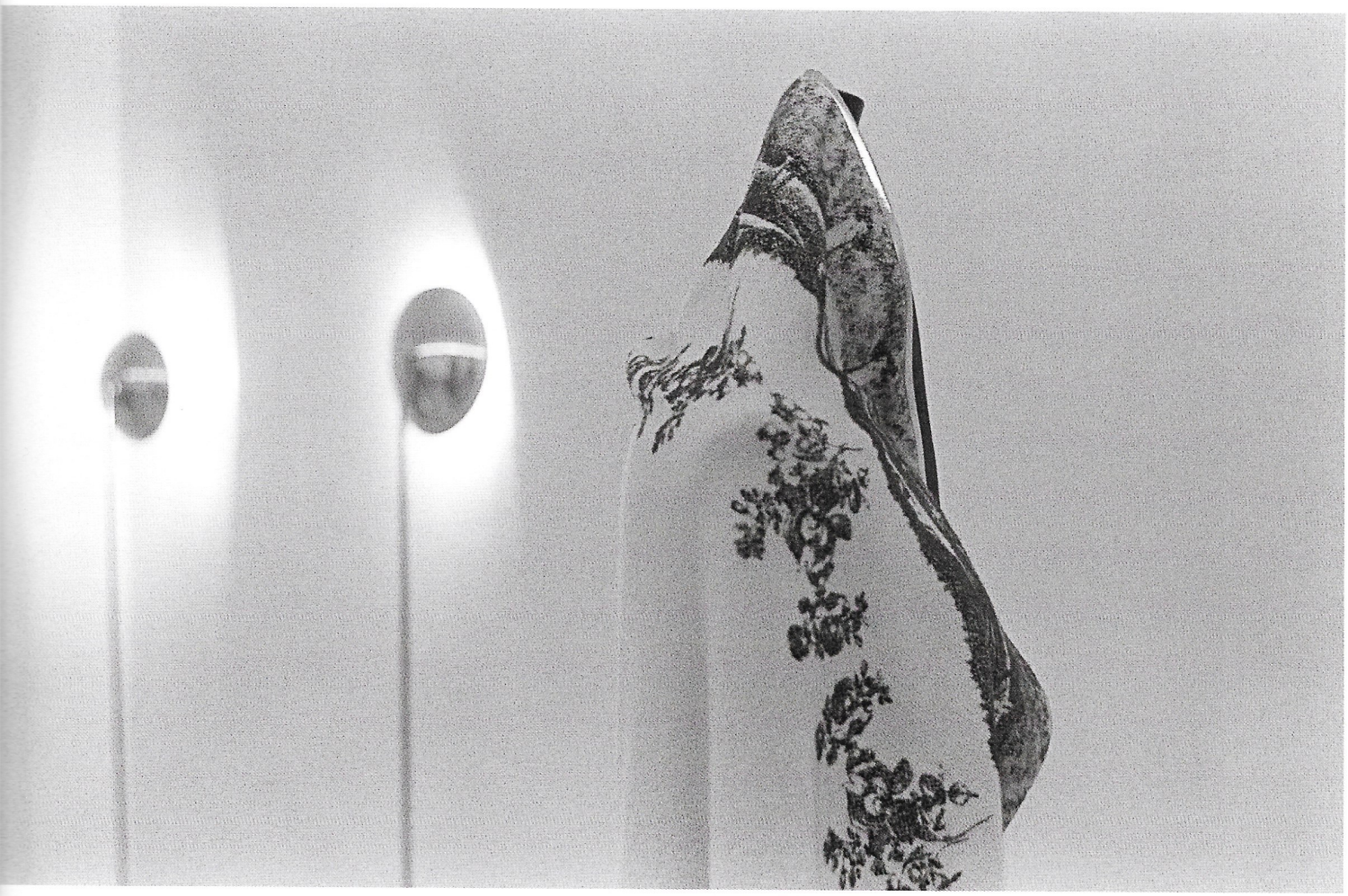
Balance

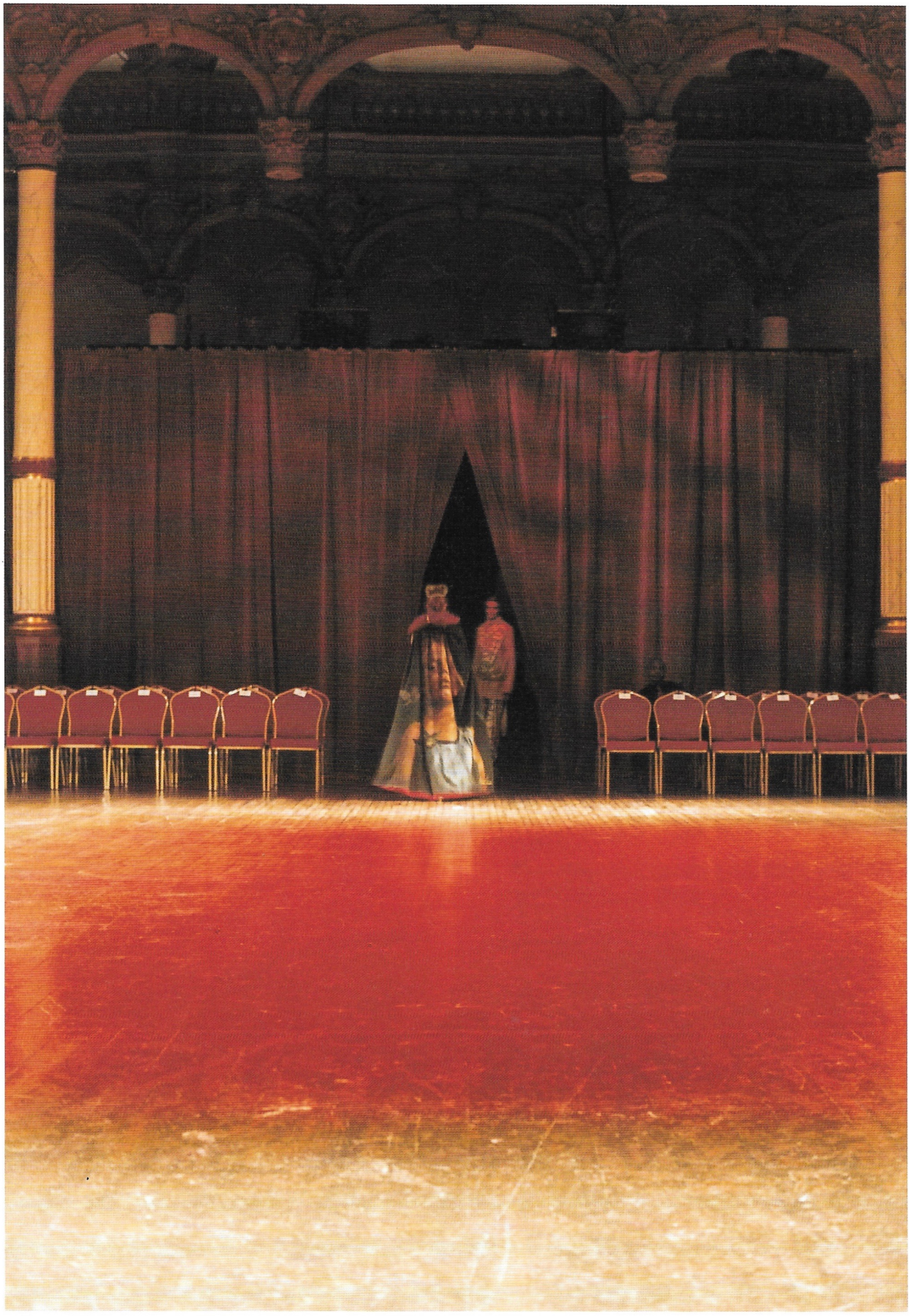
2014-15 A/W "COLD BLOOD"

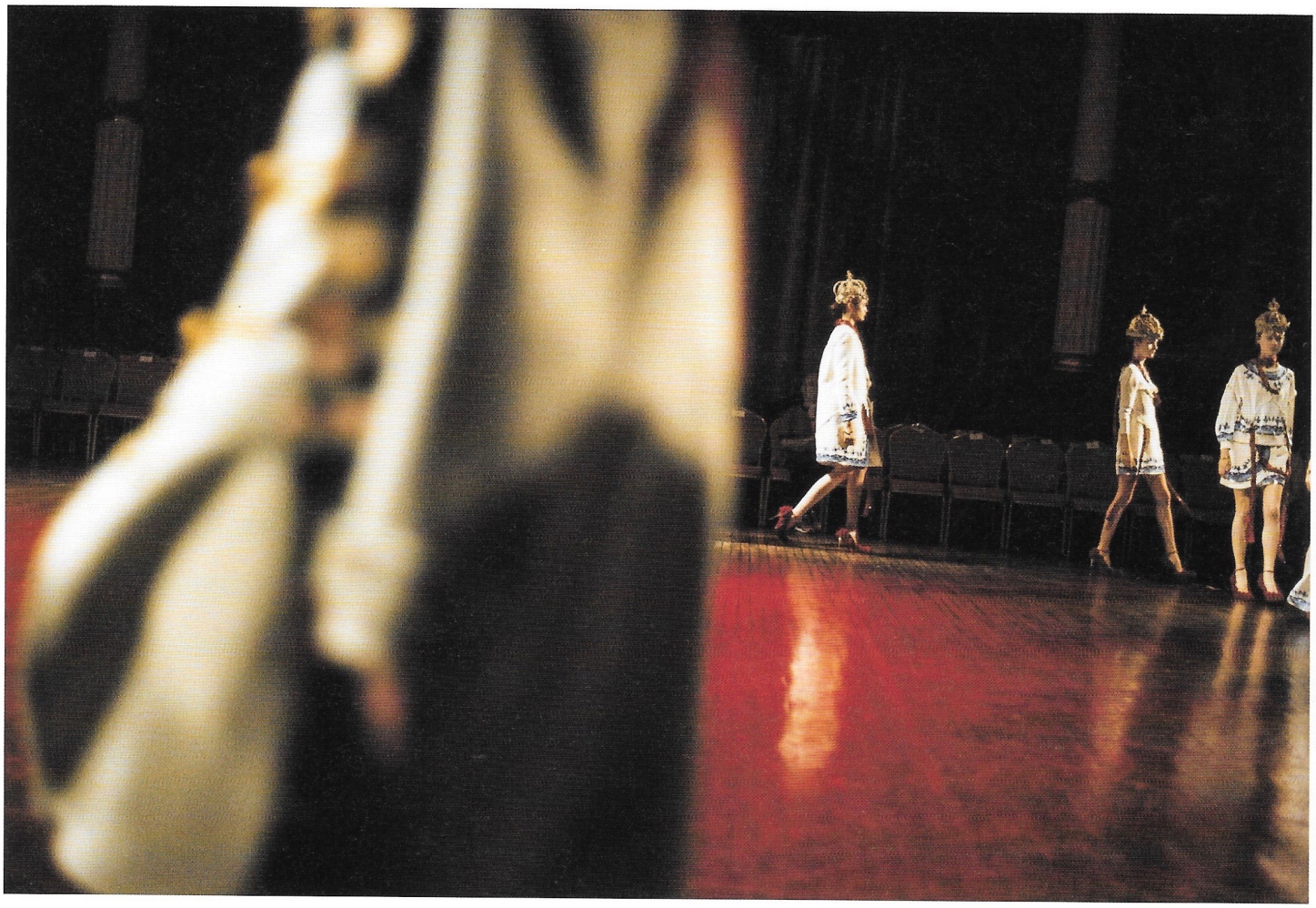
2014.2.22-2.26

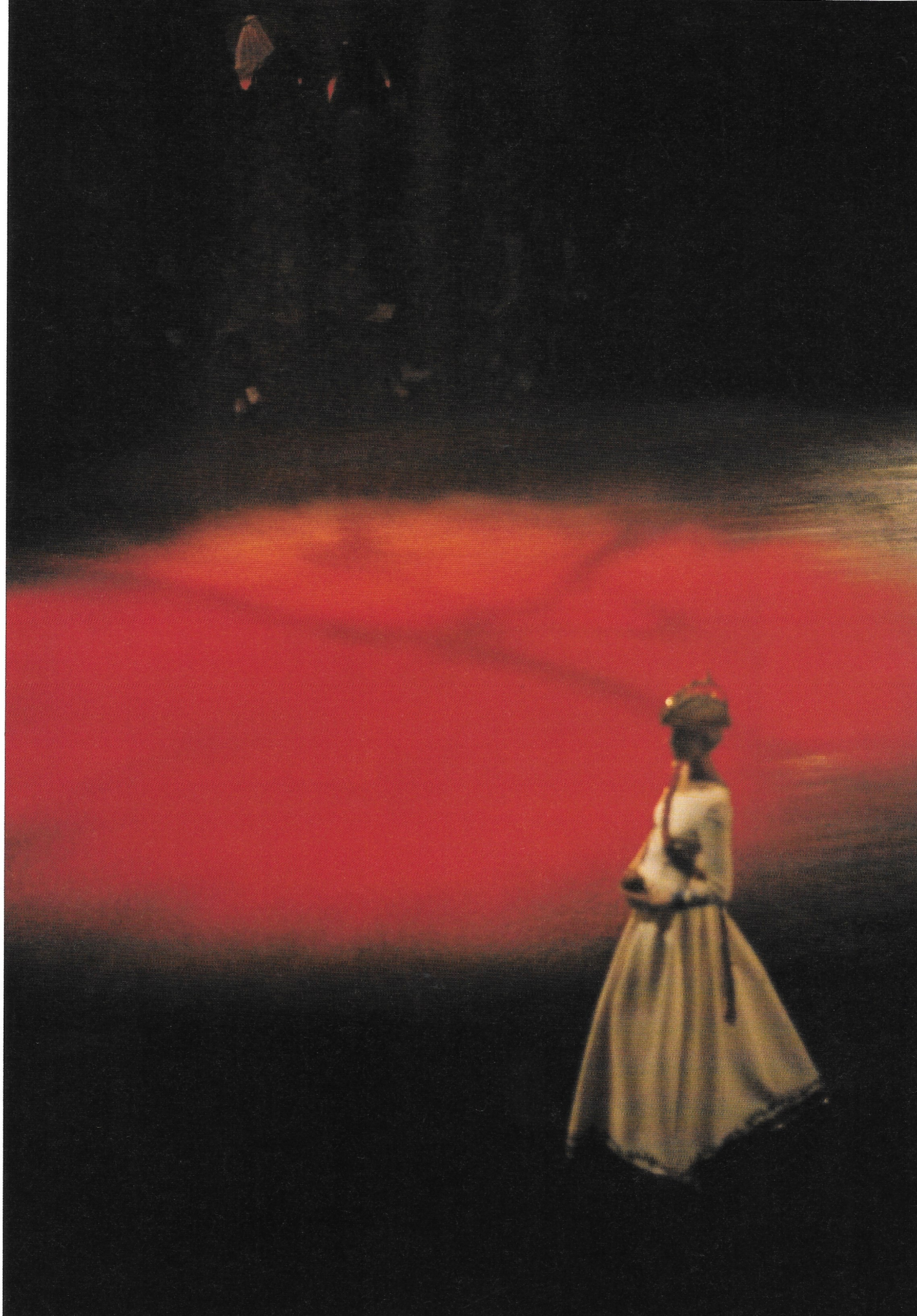


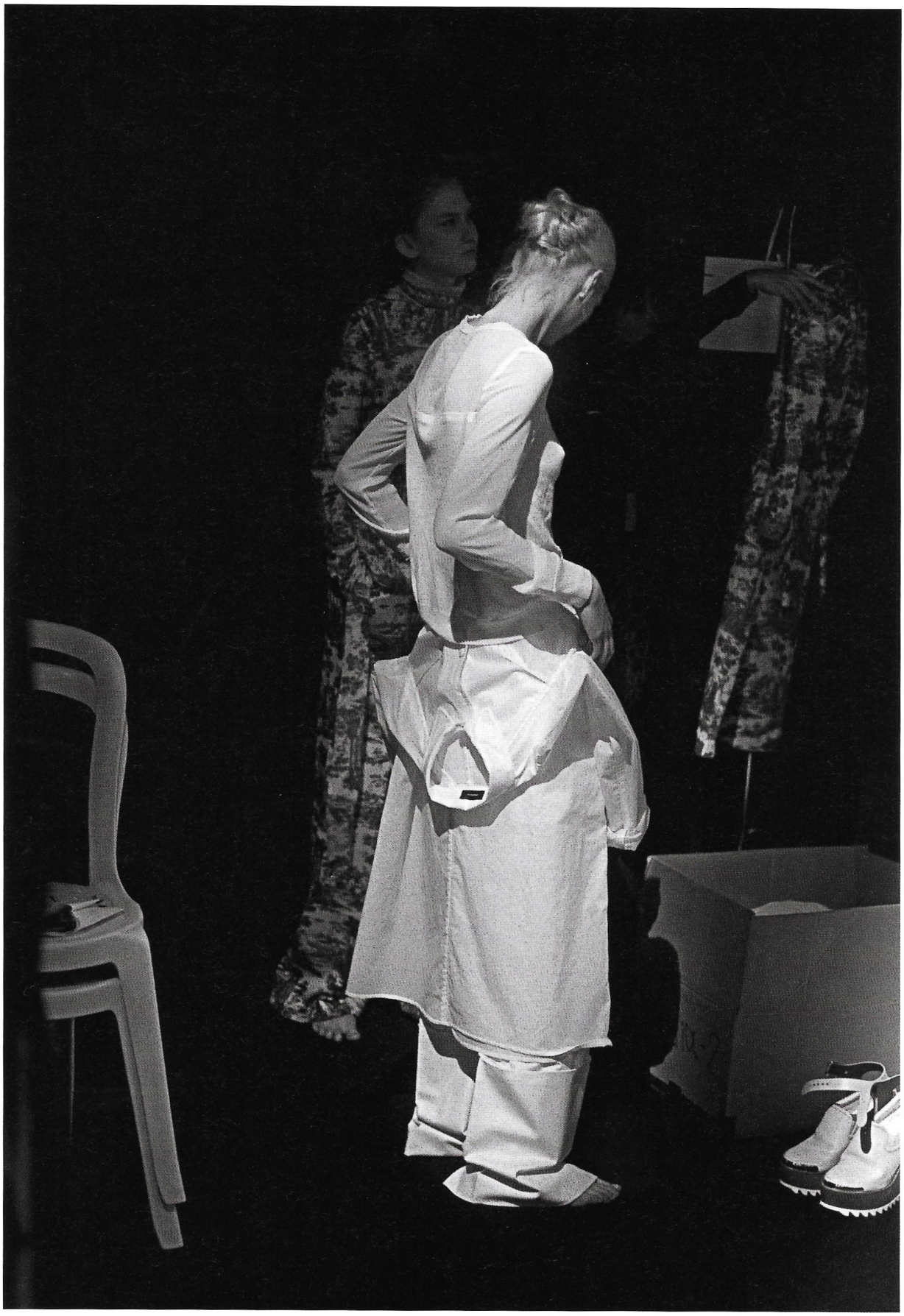


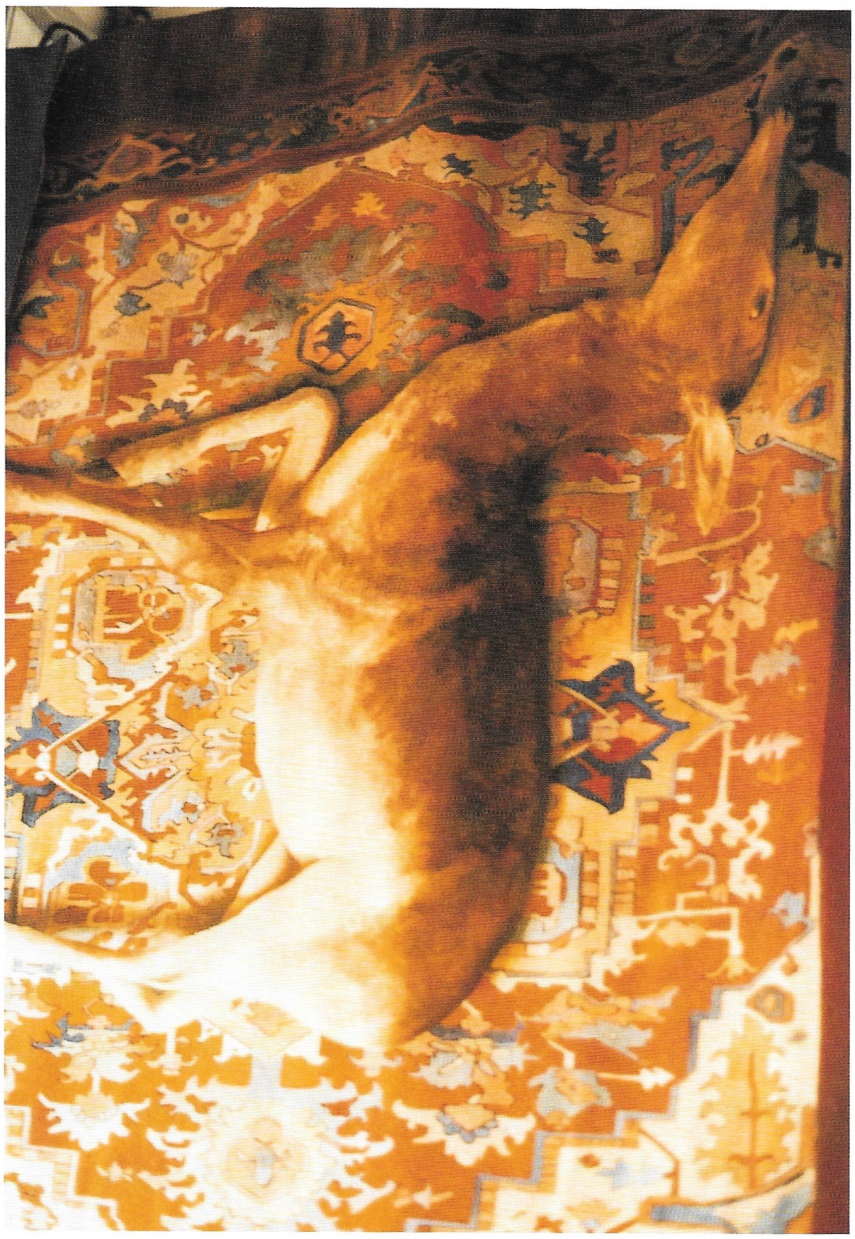








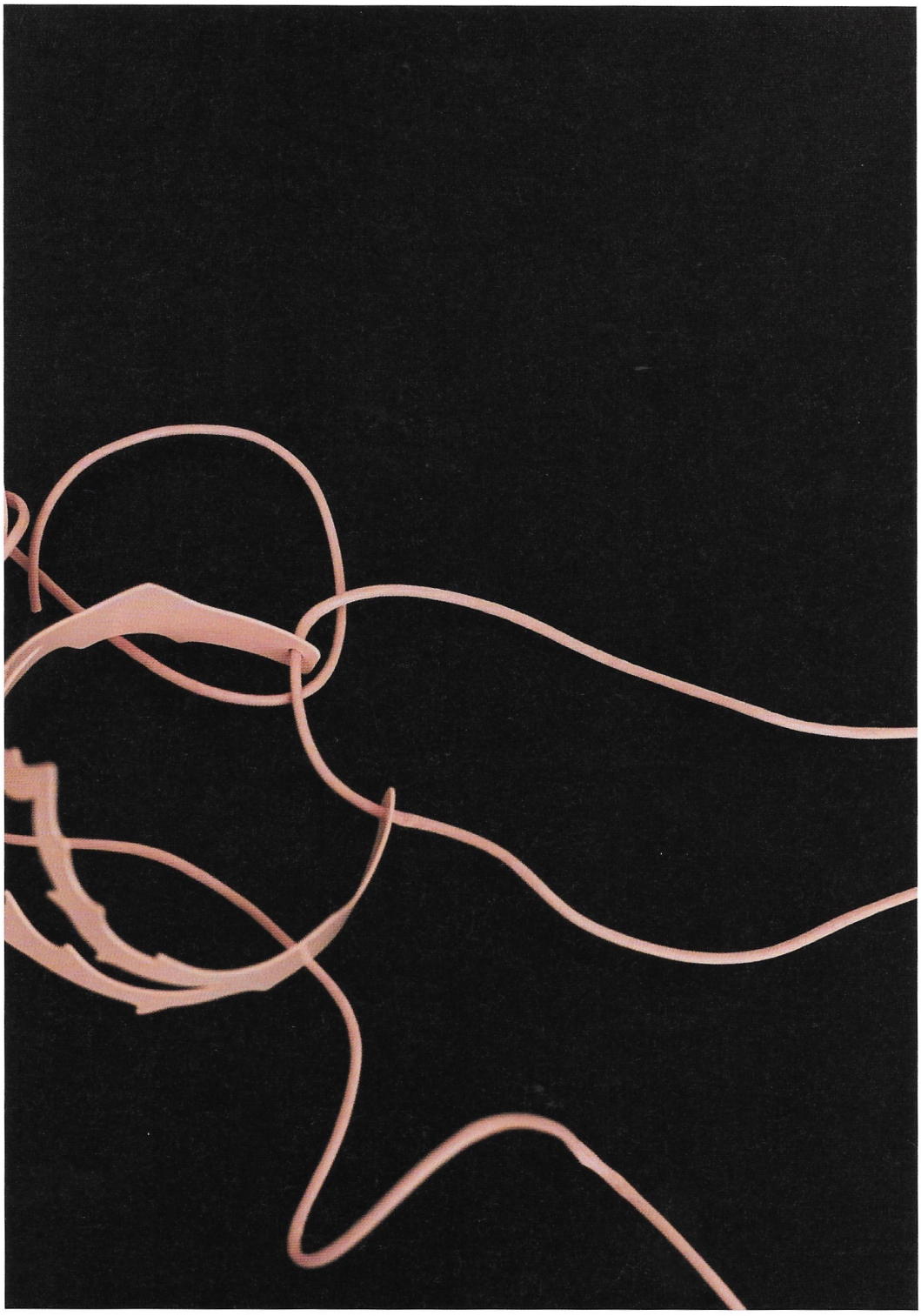




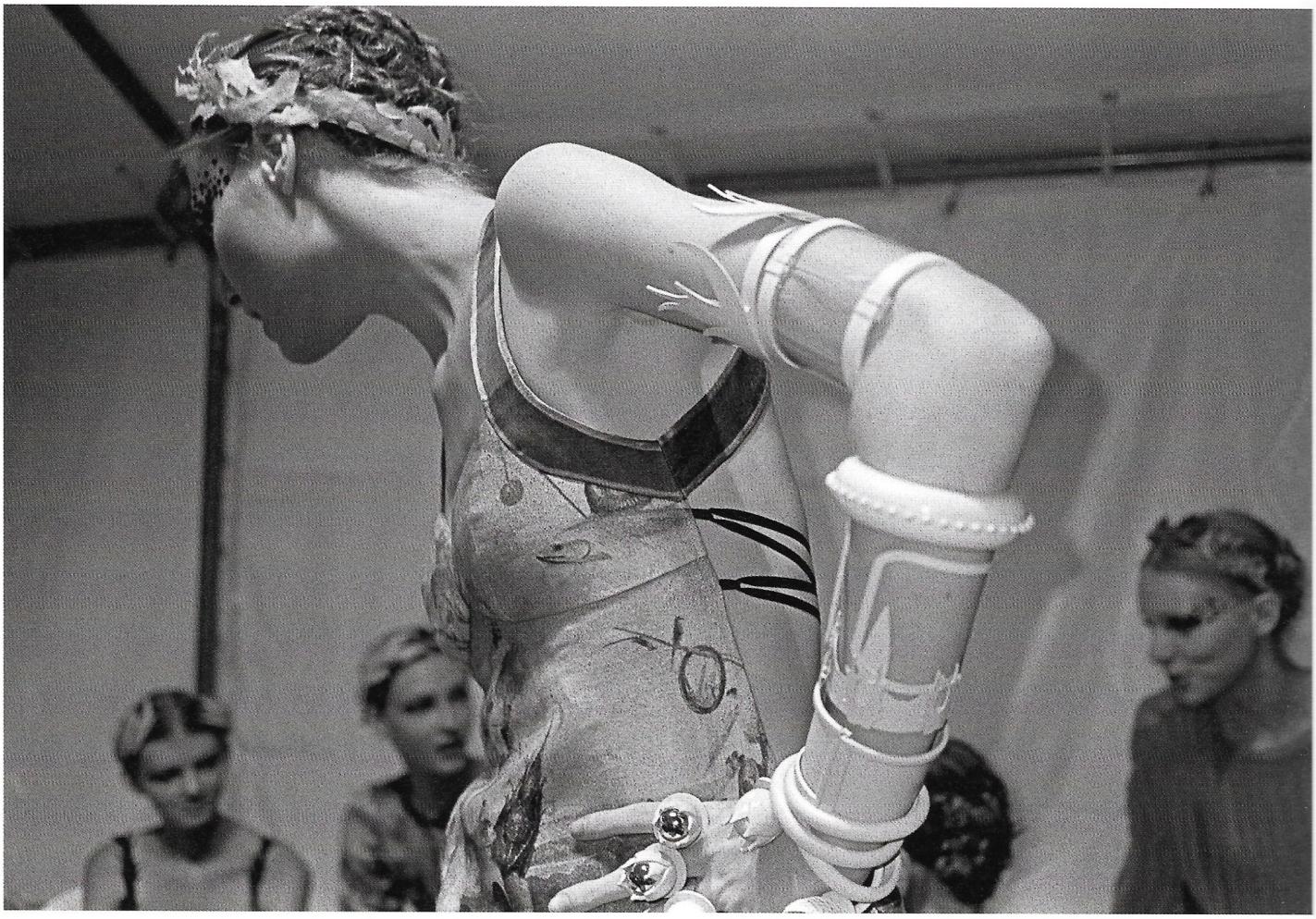
2015 S/S "PRETTY HATE BIRD"

2014.9.22 - 9.26

MADISON
GEORGIE
VITTORIA
LARISSA

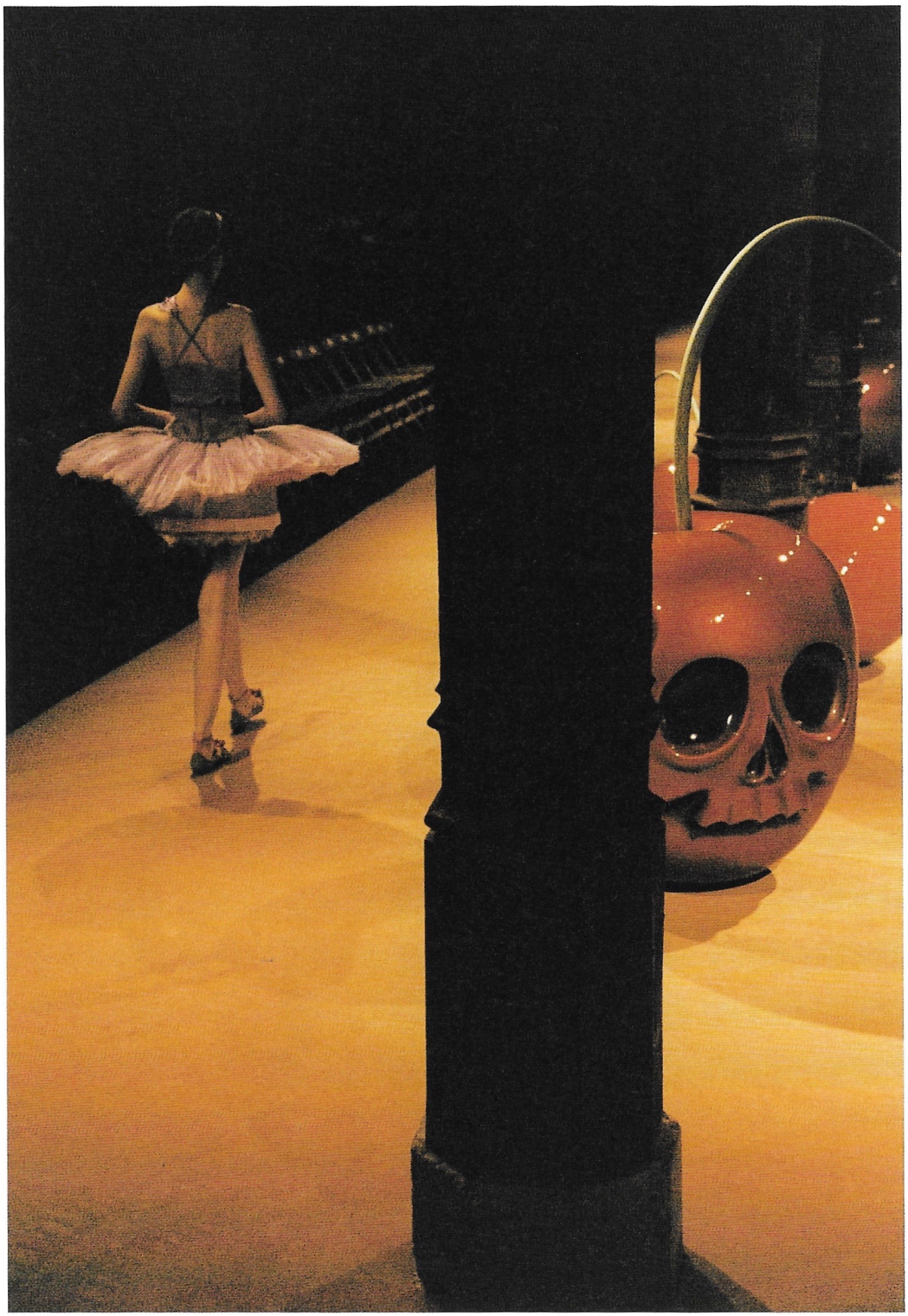


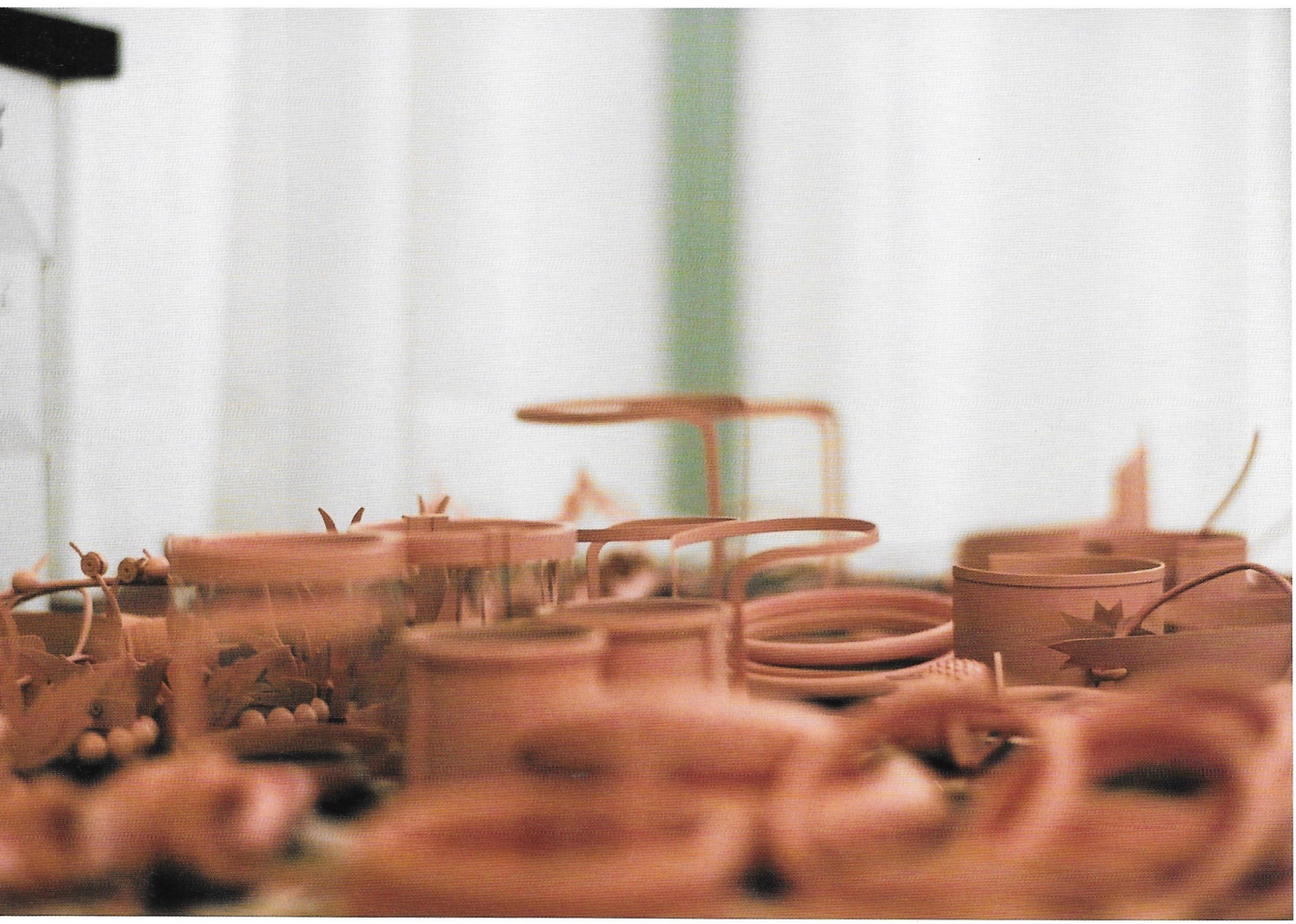
MIROITERIE
VITRERIE
P

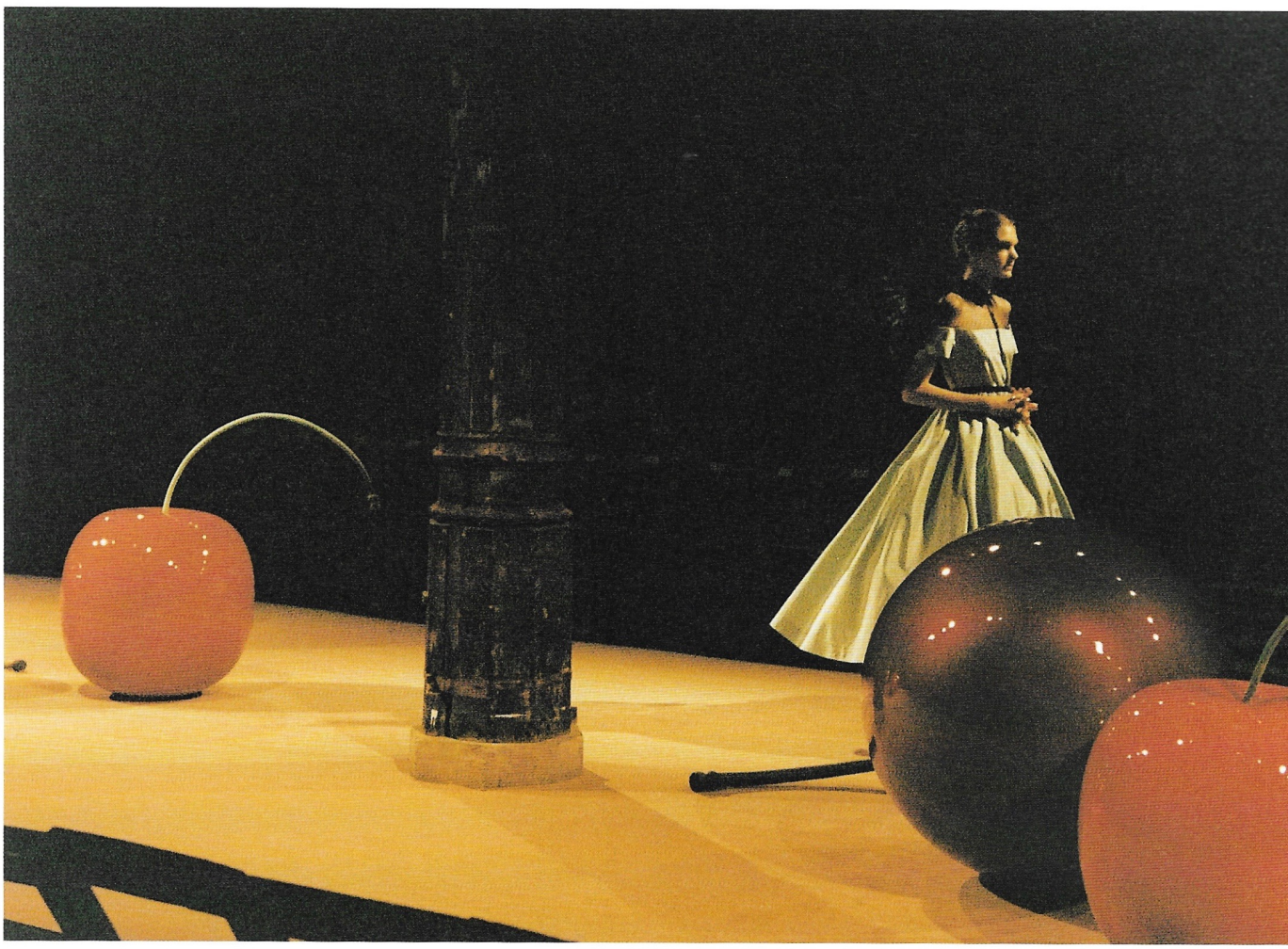


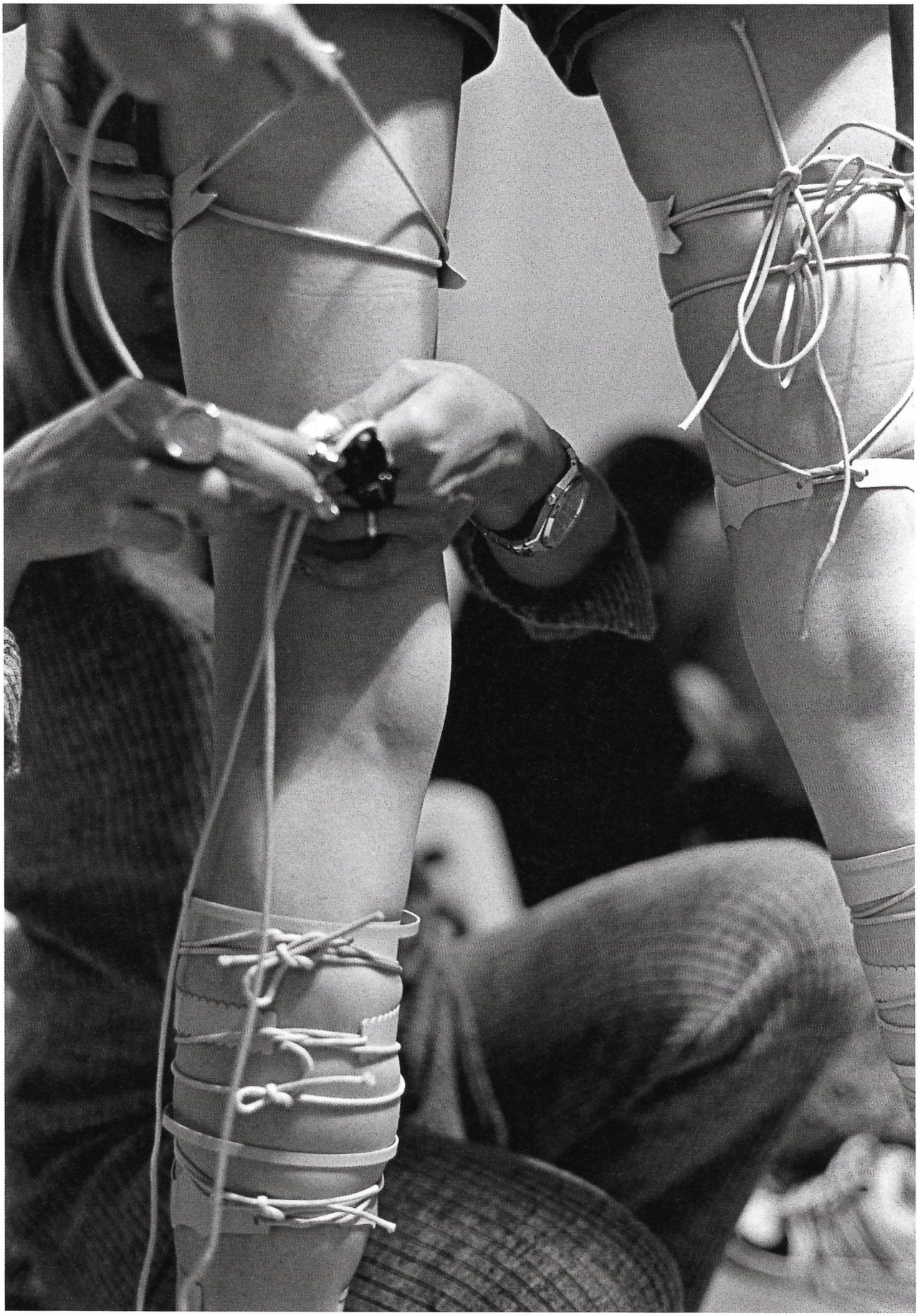
No
Photo
Please!!!

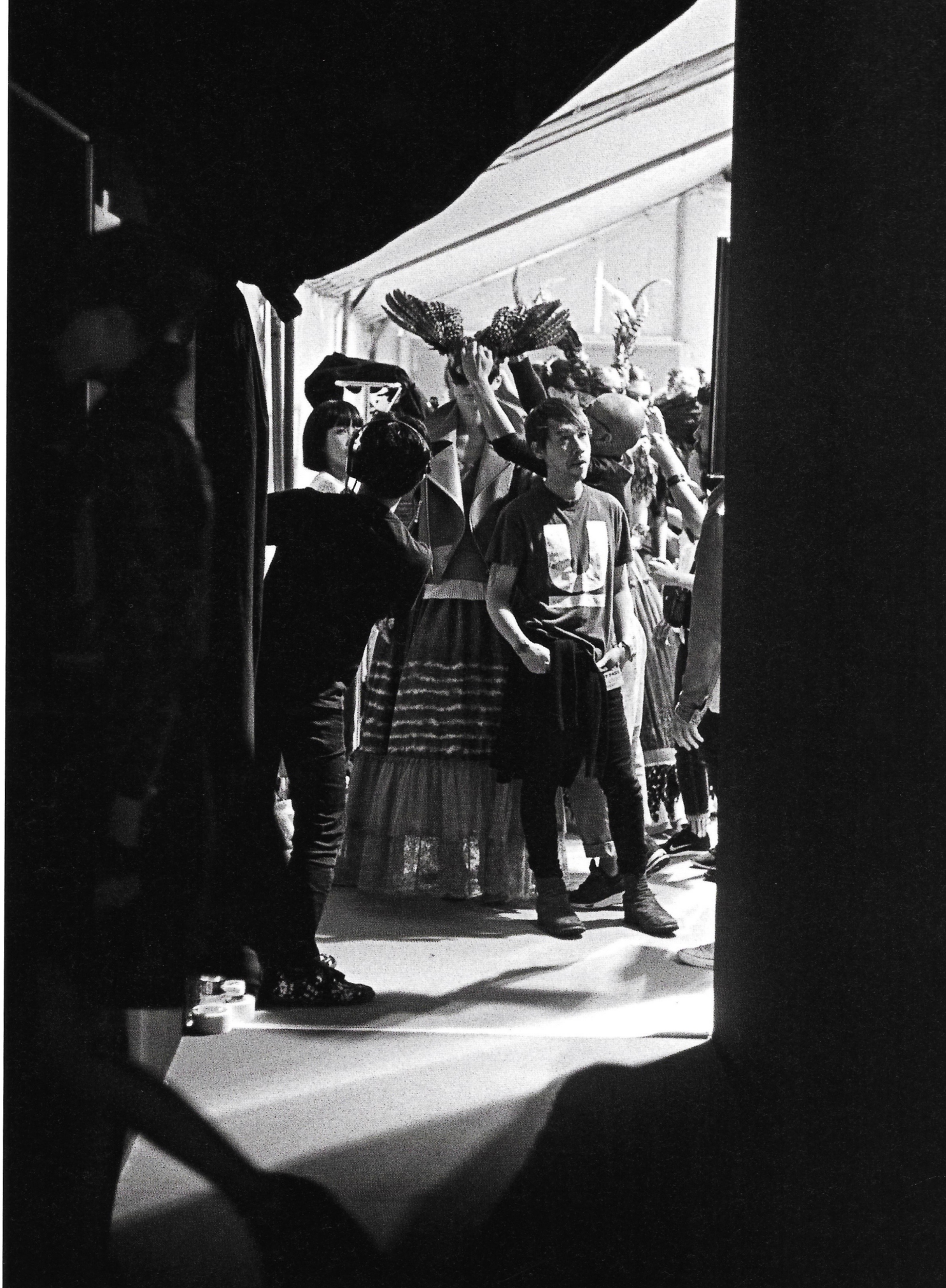
3
9
7
20
20





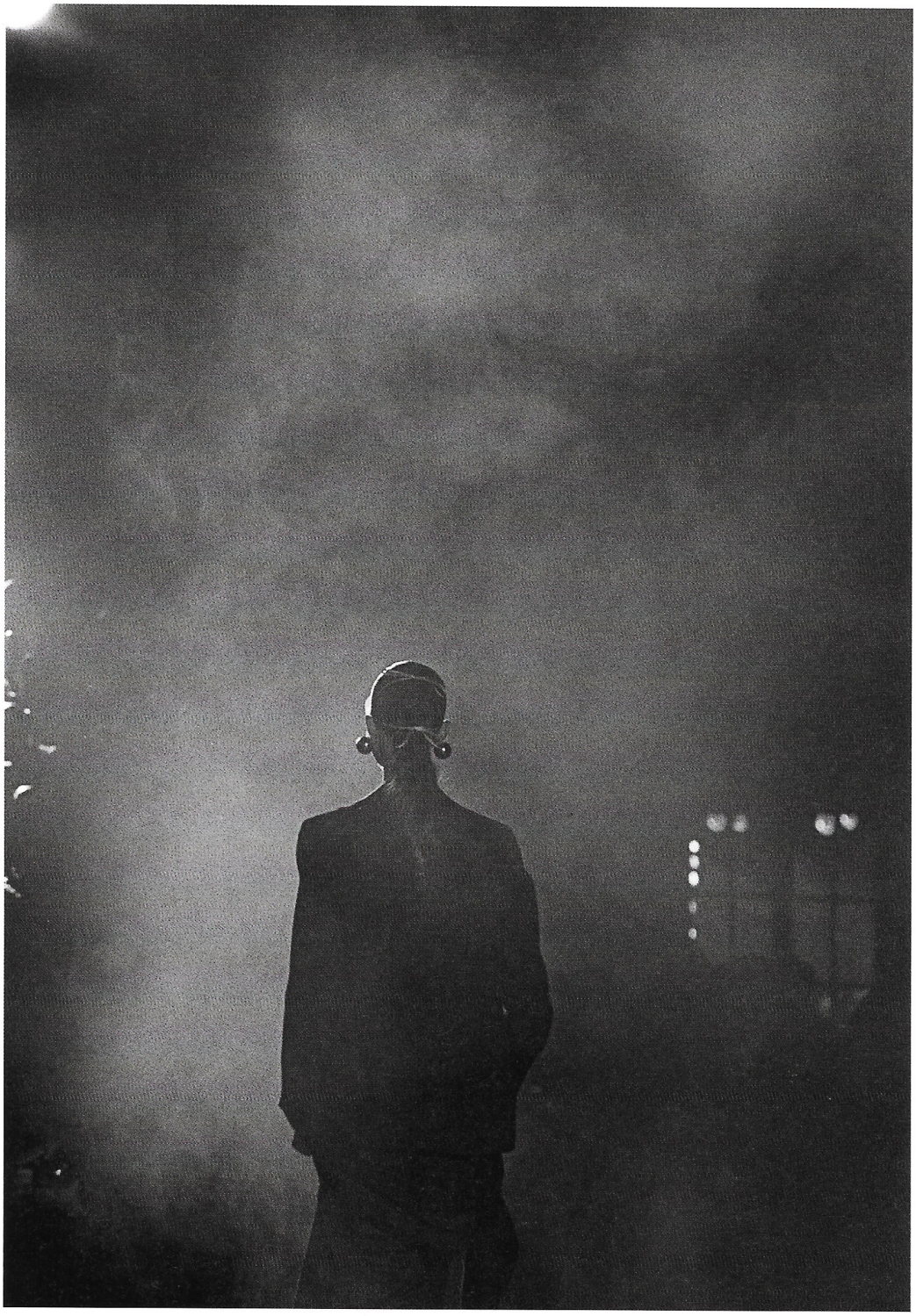


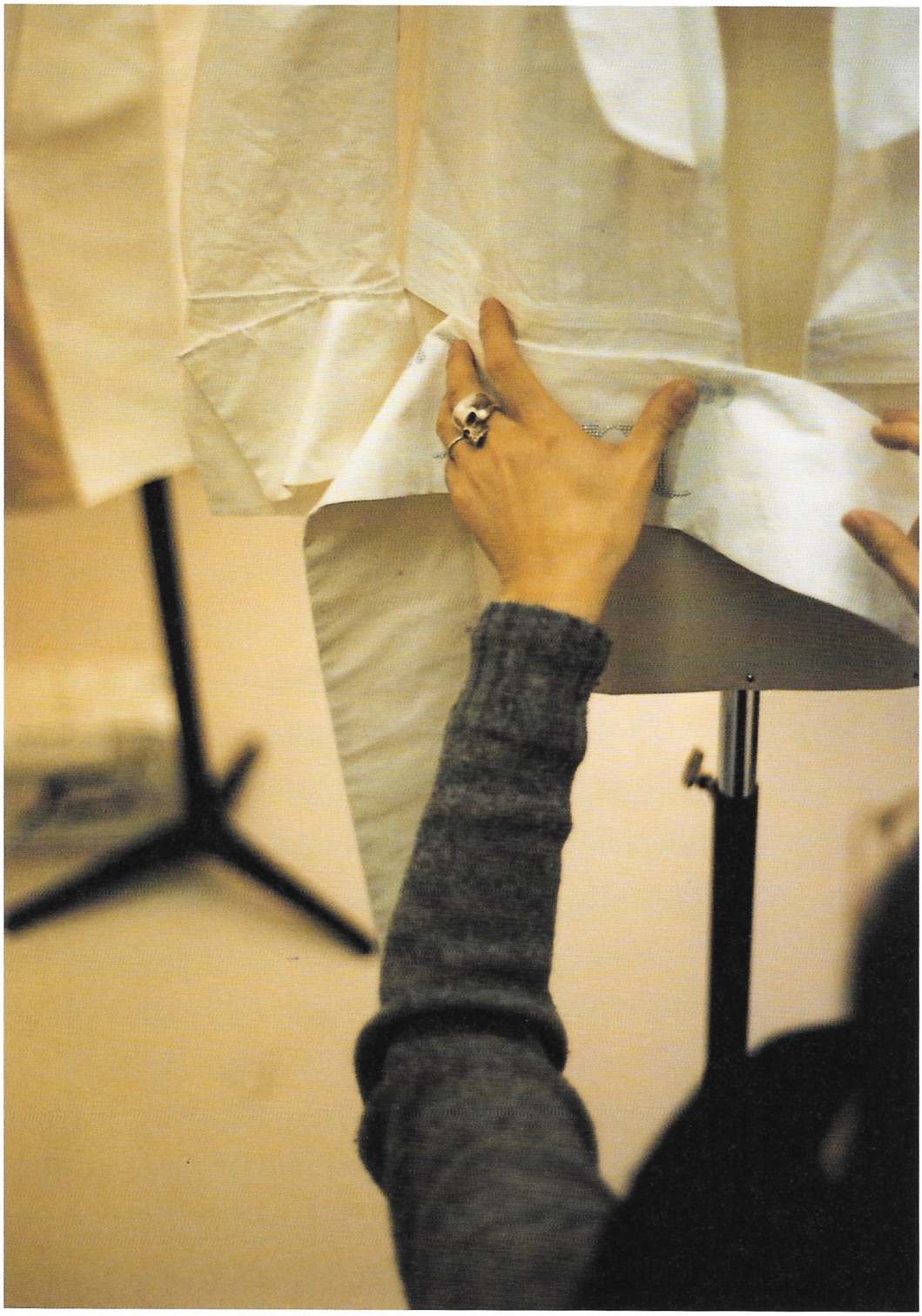


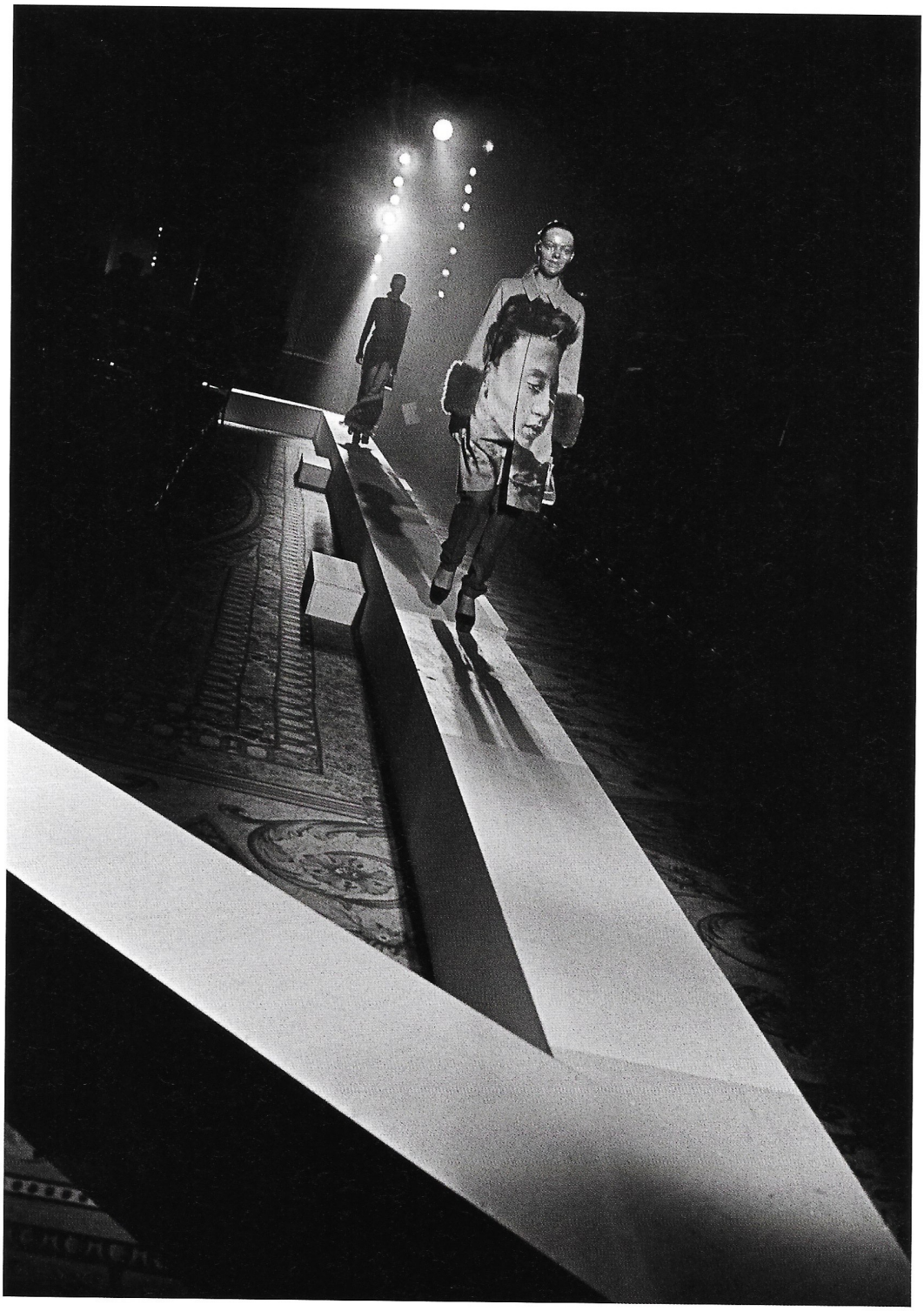


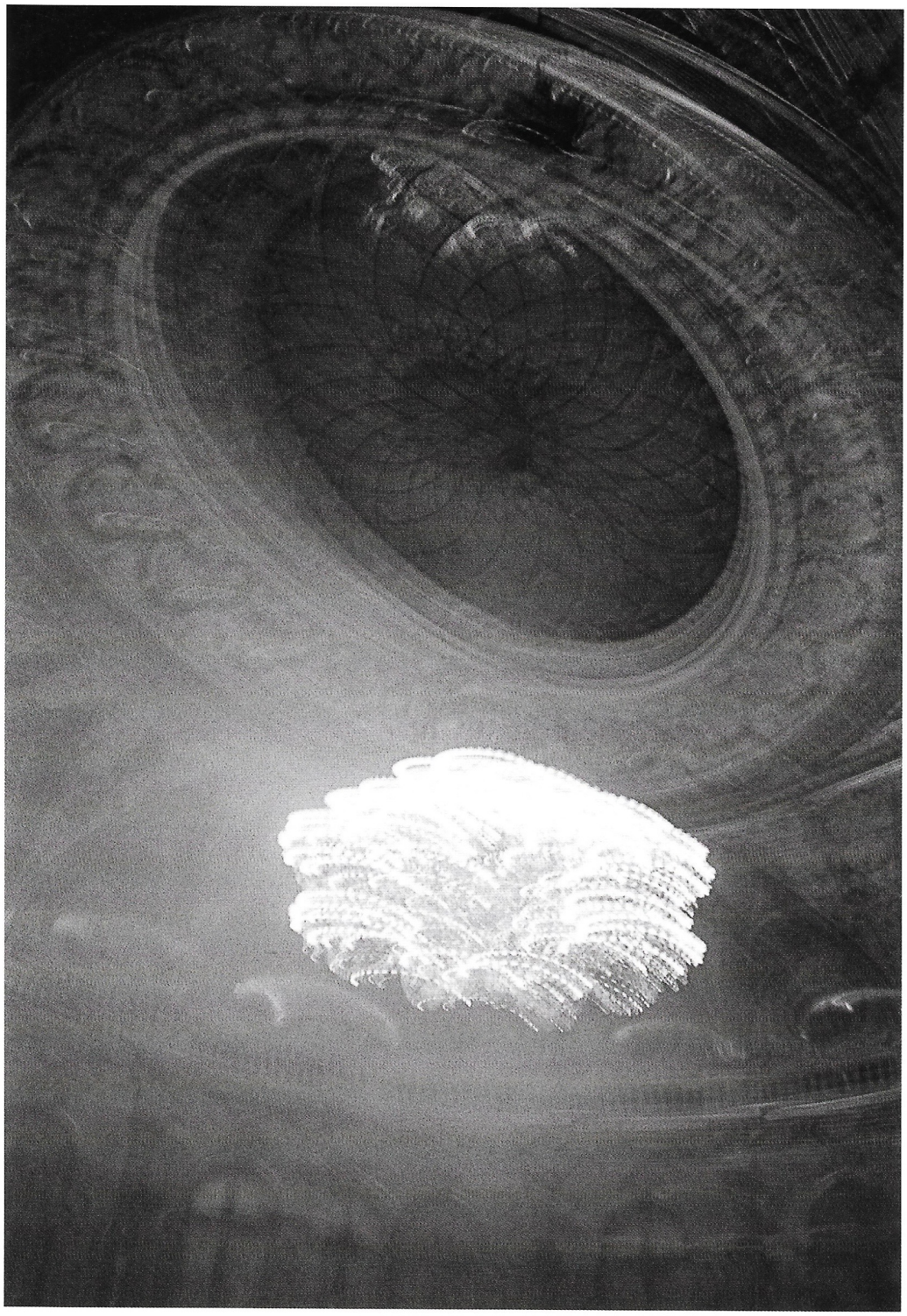
2015-16 A/W "HURT"

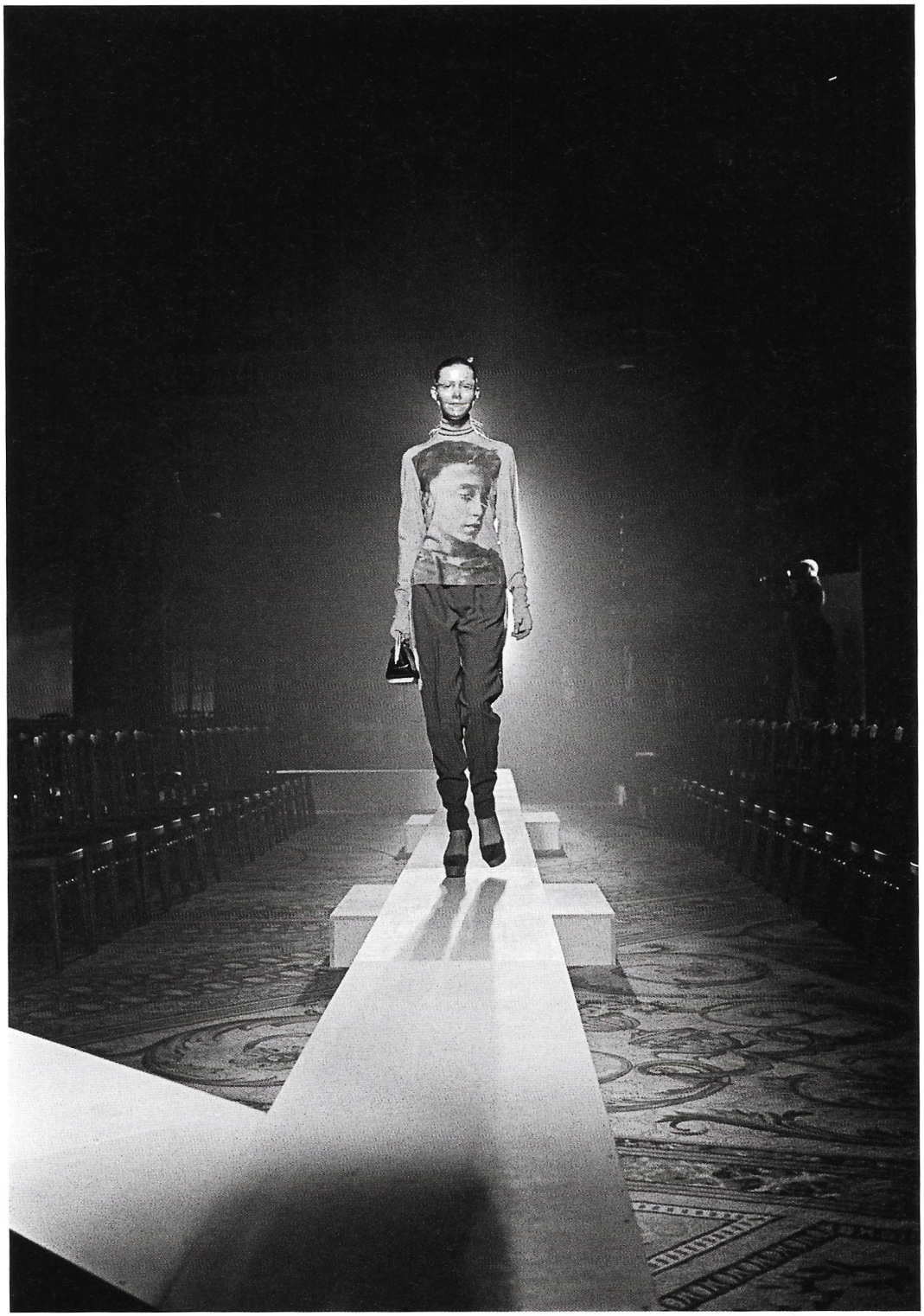
2015.3.2-3.6

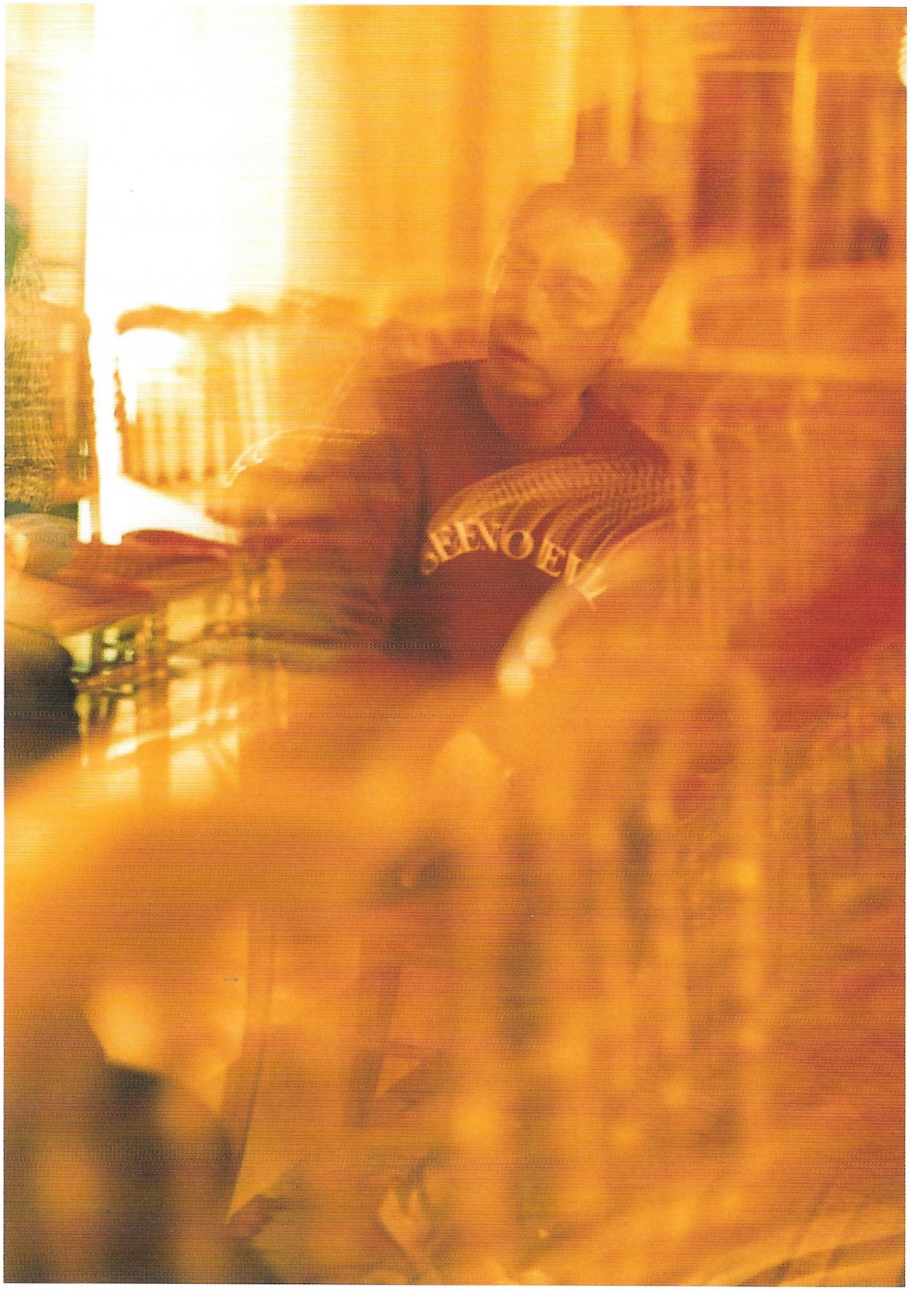


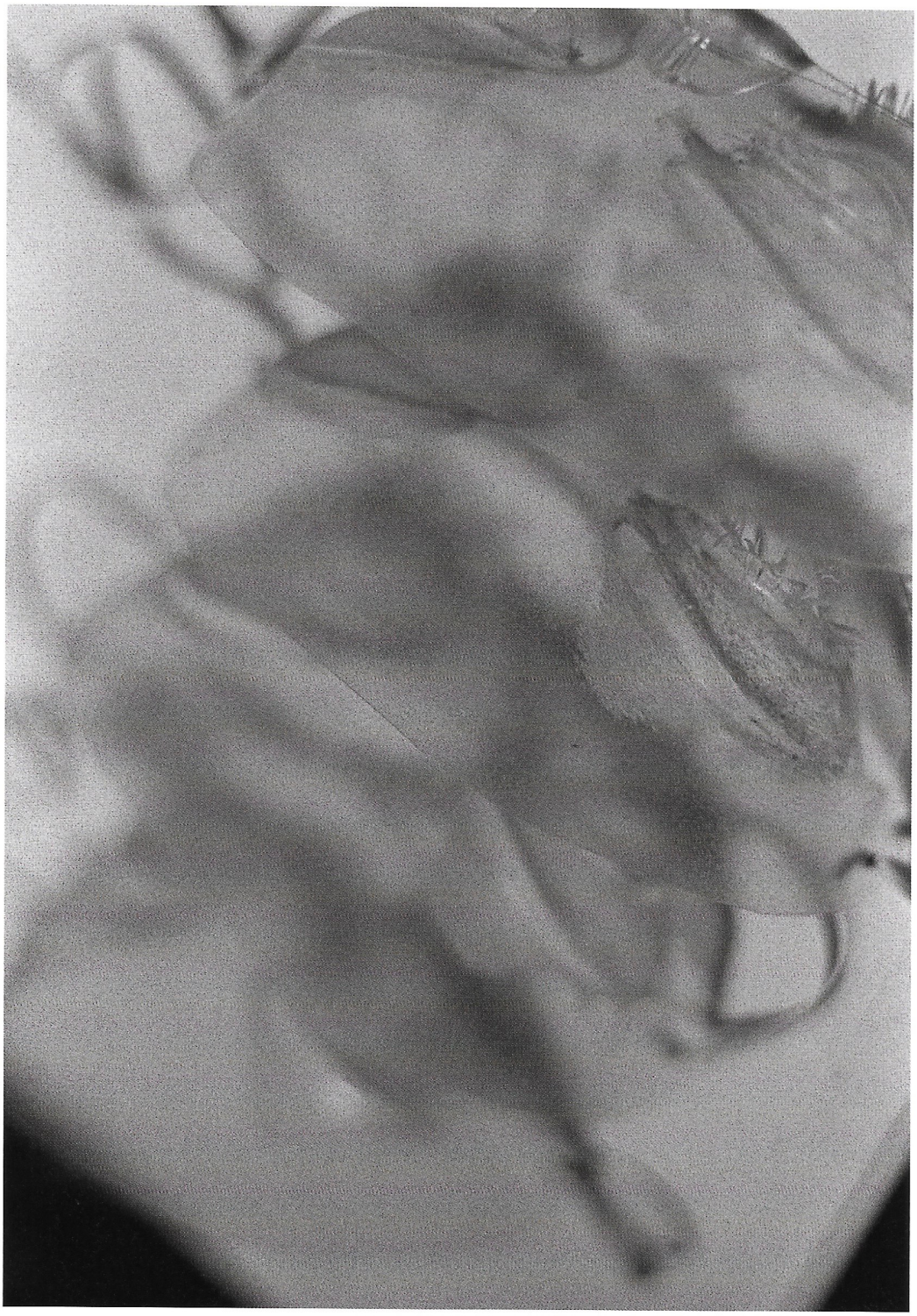


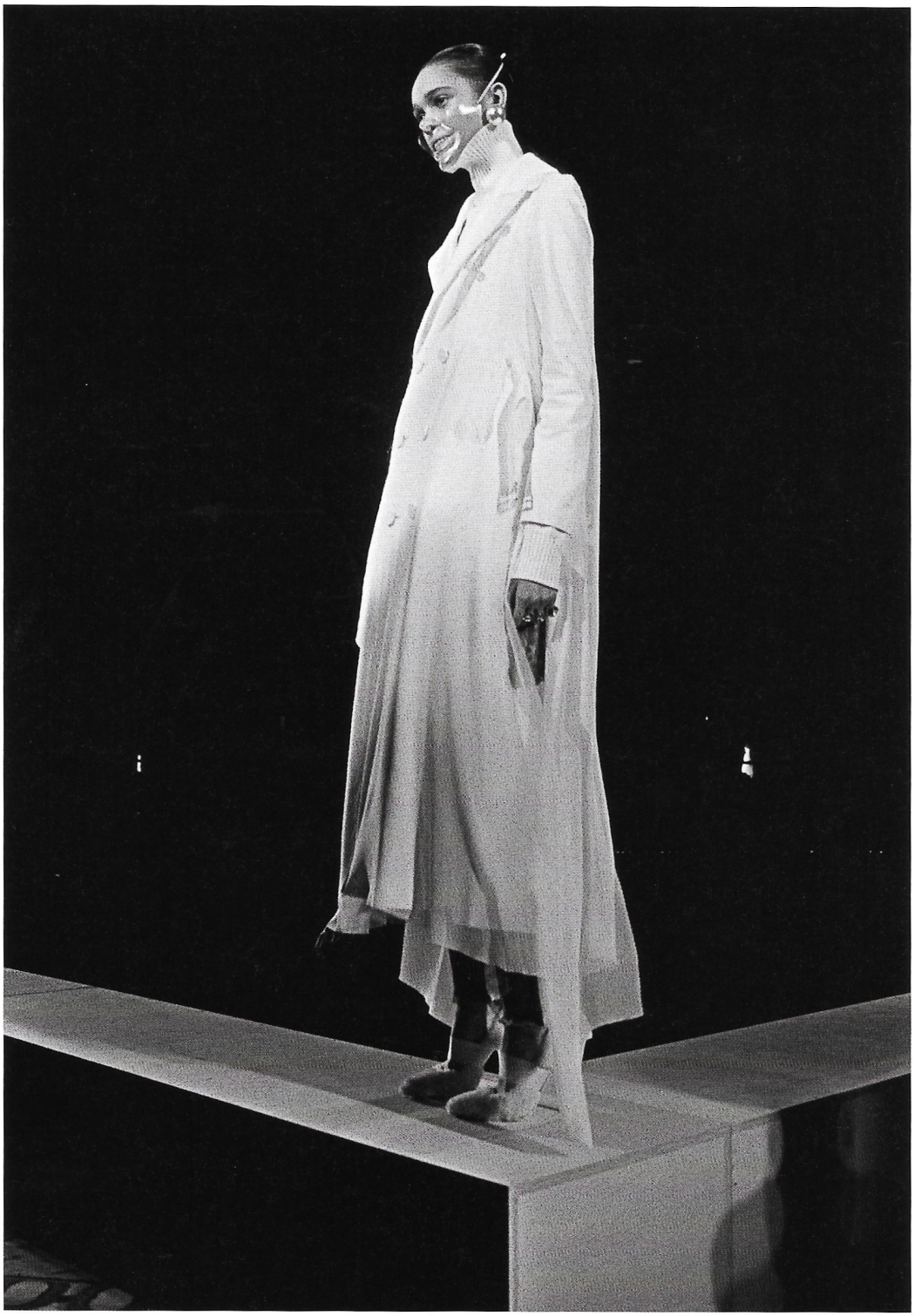


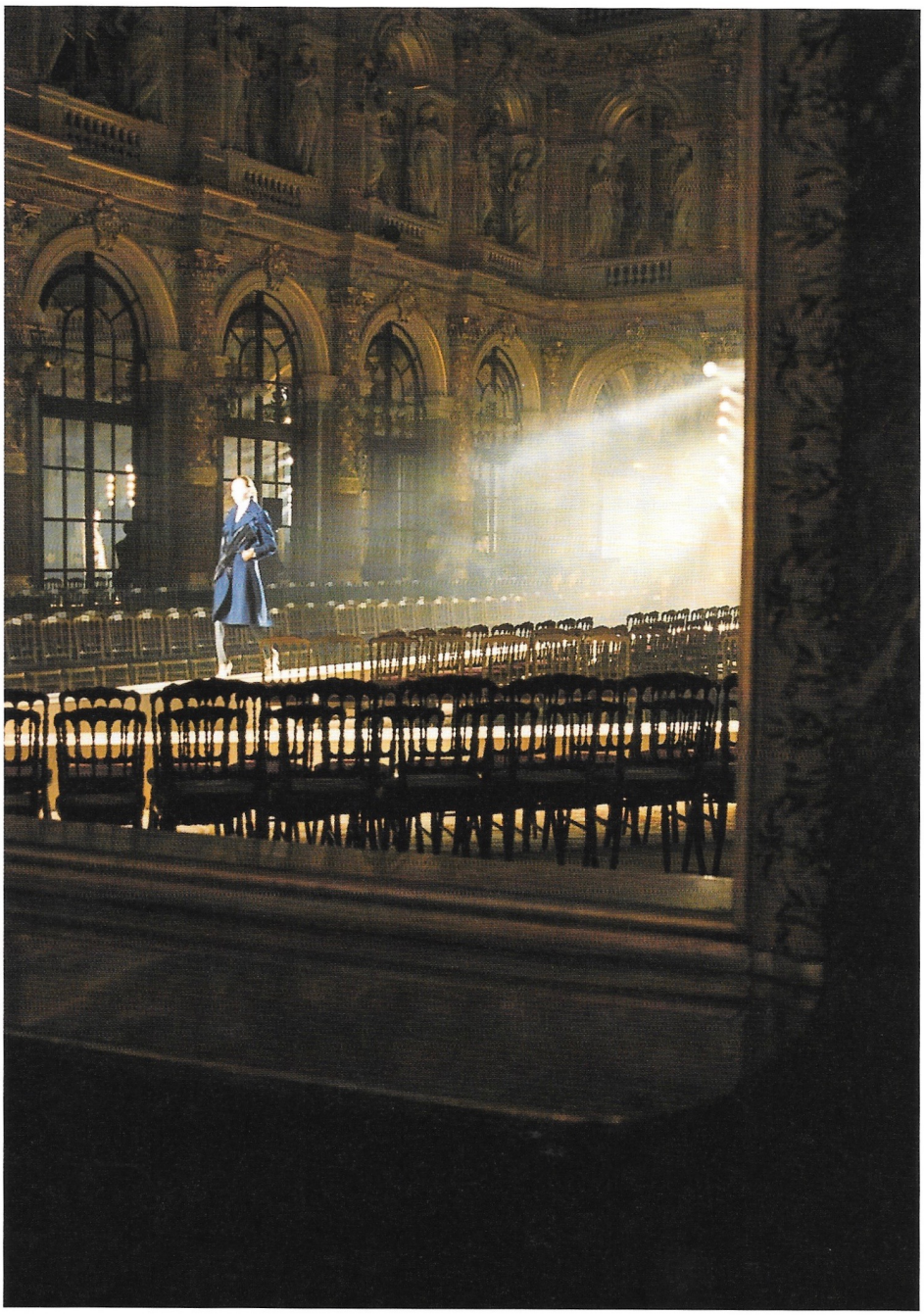












Follow the world of UNDERCOVER shows during Paris Fashion Week through backstage photography.

2013-14 A/W "ANATOMICOUTURE"

2014 S/S "GODOG"

2014-15 A/W "COLD BLOOD"

2015 S/S "PRETTY HATE BIRD"

2015-16 A/W "HURT"

Jun Takahashi & Taro Mizutani Dialogue

2017.6.5　Aoyama, Tokyo

水谷太郎（以下T）：アンダーカバーのバックステージの本は、富永よしえさんの『the Shepherd』から始まって、僕が撮影させてもらったのは2013-14A/Wから2015-16A/Wまでのショーなので、実質少し前の出来事ですよね。2年ぐらい経ってからこうして本に残していくというのは、スピード感がどんどん増していく時代の中で意義があると思うし、アーカイヴとして残っていくことは写真家としてもすごく嬉しいですが、今あえて出版していくことの真意は、ジョニオさん的にどういう部分があるんですか？

高橋盾（以下J）：自分としては、単に洋服を作って、ショーをやって、人に見せました、ということだけを目的としているわけではなくて、作ってきた過程や、なぜそういうショーを表現したのかということが大事で。今の時代、情報を消費していくSNS的な行為でしか一般の人たちは見てないけど、自分のやっていることと比べるとだいぶ差がある。東京で何ヶ月もかけてショーの準備をして、それをパリに持って行ってショーをやって、という流れの中で、ショーの現場の裏でどういう作業で、どういう思いで作って発表しているか、ということを残していきたいという想いがあって。自分もいちファッションのファンとして考えたら、普段見られないところだし、絶対に見てみたいところだから。ファッションデザイナーの表立ったイメージと、一生懸命積み重ねてやっていくという裏で起こっていることが対当であるべきだと思う。前に出版した（富永）よしえさんの『the Shepherd』もそうだけど、これからファッションを目指す人たちにこういう内容の本で伝えていきたいという感覚が一番の主旨かな。

T：僕も似たような感覚を持ってこのバックステージの写真を撮ったところがあります。会場にはランウェイの一番前にカメラマンたちがいて、そのランウェイ写真がすごく簡単に見られる時代になって、あの写真ですべて終わってしまっているような感覚があるんです。そういう写真は確かに洋服もきれいに見えているし、洋服の購買に繋がることもたくさんあるかもしれないけど、写真ができる力ははっきり言ってそんなに発揮していないと思います。実はもっと美しくて、格好よくて可愛いくて、強くて、儚い。そういう想いはパリに行かせてもらって実感しました。スタッフ同士が熱く議論する感じとか、でもそれは個々にいい仕事をするためにやっている感じとかも含めて。

J：15分間のショーをSNSとかウェブの速報で出すのはいいことだと思うけど、ファッションを作る側としては、そこまでの過程が一番おもしろいところでもあって。たとえば、アトリエでオーディションした後にみんなで食事して、若槻さん（演出家の若槻善雄）たちがいかにいいショーをやるかということに向かってみんなで話し合ったり。ショーの15分はあくまでも最終的な発表の場だけであって、そこにたどり着くまでの道のりには一番ドラマがある。そこが本当に一番おもしろいところかなと。

T：そこにはSNSの“いいね！”ができないですからね（笑）。たとえば、ミュージシャンがライヴ前の楽屋で過ごしているような写真とかも、最近は見なくなりましたからね。

J：本当に少なくなった。でも、自分の好きなミュージシャンがどうやってツアーを回っているか、どうやって音作りしているかということに興味があるし、それは俺だけじゃないと思う。そこが物を作っていて最も時間をかけているところだしね。だから、自分が表に出たいという気持ちはまったくないけど、自分がこういう写真集という形で出ていくことで、ファッションは表層だけじゃない、ということを伝えていきたい気持ちが強くある。

T：僕はこの写真を撮って強く思ったことがひとつあります。ショーに向かう絶頂たるや、その渦中にいたらもちろんヒシヒシと感じたんですが、どこかですごく儚くて。その儚さって写真的で、写真との相性がすごくいい。キャスティングしてフィッティングして、リハーサルして、という記録が、ファッションと写真の相性の良さをすごく感じました。だから、よりきれに撮ろうとか、より美しく撮ろうと衝動的に思ったところがあります。

J：アンダーカバーの場合は普通のランウェイと少し違って、もう少し世界観があるというか。自分はショーをひとつのエンターテインメントとして考えているから。それを作り込んでいくのは、ライヴというか、音楽に近いかもしれない。太郎が裏側に入って記録してもらったのは、その瞬間を刻んでいるわけで。俺から「ここを撮ってよ」というようなことは何も言わないけど、太郎がその場にいて何を撮るべきなのかを自ら感じて撮っているわけだから、それは太郎のライヴだし、俺のやっているライヴの一部を太郎の目線で撮っていくというのが、さっき太郎が言った相性の話だろうしね。それぞれの見方ができるのがバックステージであり本番であり、ただのファッションショーではないと思っているから。よしえさんが撮って、太郎が撮って、ワタルくん（写真家のWATARU）が撮り終えて、いまモーリ（写真家の守本勝英）が撮っていて。シーズンによって写真家を変えて撮ってもらっているんだけど、それぞ

Taro Mizutani (T): Yoshie Tominaga's "the Shepherd" was the first photo book to capture the behind the scenes action at UNDERCOVER shows. I had subsequently photographed backstage from 2013-14 A/W to 2015-16 A/W. Although the photos in this book are relatively recent, it seemed meaningful for me to publish such a series in our fast-moving world. As a photographer, I am also happy to know that my work will be released as a book. What kind of meaning does it hold for you to publish backstage photos from your recent shows?

Jun Takahashi (J): I do fashion shows not just to show my clothes to people. The show process and the reason why I do shows in a certain way are also important. Although people now see fashion shows in the same way they consume information on social media, there is an enormous gap between such fast media consumption and what I actually do. It takes me months to prepare a show in Tokyo before taking it to Paris. I have always wanted people to know how we create a show behind the scenes, as well as my ideas about creation and showmanship. Also, as a fashion lover, I enjoy seeing backstage photos, because they go below the surface. The enormous efforts made by fashion designers should be respected as much as their glittery image. Just as we did through a series of photos in "the Shepherd", I would like to share this line of thought by publishing books with a particular point of view. That's why I publish the behind-the-scenes photos.

T: I took those backstage photos with similar ideas in mind. At a fashion show there are professional photographers occupying the front row. Because the runway photos they take are easily accessible through the Internet, it seems that everyone thinks that those runway photos tell everything about the show. I admit that the clothes look beautiful in them and they may be good for selling fashion, but that is not all fashion photography is for. A fashion show is more than the sum of its parts - beautiful, powerful, and fragile. I realized that after visiting Paris and seeing people put in tremendous energy and passion in order to create a better runway experience.

J: Though I think it's good to see a show as the final, polished product, especially for someone who cannot be at the show but can only look at runway photos, as a designer I am most interested in the process of making the show. For example, I sometimes have dinner with my team after having an audition at my atelier. There, people such as Wakatsuki (the stage director) often begin a discussion about how we should create a better presentation. A 15-minute-long show is simply a final presentation for us. There are deeper stories to tell in the process of making it. And I think the process is the most exciting part.

T: But people cannot press a like button for that (laughs). We also rarely see photos of musicians sitting in their backstage room before a gig, too.

J: Yeah, we hardly see it now. I am, however, always curious about how my favorite musicians tour the world, or how they make their songs, and I don't think I am the only one who thinks that way. That is the part creators put more time and effort into. Although I am not interested in appearing in public, I publish books with my backstage photos, as I am always eager to tell people that fashion is not just about superficial beauty.

T: While taking those behind-the-scenes photos, I strongly felt that there was a sense of ephemerality in the process of making a show, even when people followed a hectic schedule working towards it. That ephemerality was truly photogenic and fitted really well into my work. By recording what happened in the process of casting, fitting, and rehearsing, I discovered the chemistry between fashion and photography. And that is why I impulsively tried to capture the chaos of the backstage with a sense of grace.

J: I think what gives UNDERCOVER shows a unique perspective is that I see fashion shows as a kind of entertainment. So, the way we make a show might be similar to doing a live performance or a concert. Your photos capture this well. Since I never said to you something like "Hey, come here and get a shot of what we are doing now"; you brought your own feeling to what was important to document. It was your own live performance, photographing a live performance done by me. Perhaps such similarity causes the chemistry you mentioned before. In my opinion, each photographer can add his or her own perspective when photographing backstage or front of house of an extraordinary fashion show. After Yoshie, you, and WATARU (a photographer based in Paris) all have shot UNDERCOVER shows, and now Mori (Katsuhide Morimoto) has taken over that role. And each of you has a very unique idea of what you want to capture and sees the shows from a completely different perspective.

れの視点と想いがまったく違うわけ。

T：見事に違いますよね(笑)。

J：その写真家の人選は、俺にとって友達としても写真家としても、自分の視点を持っている人というのが前提だから。今並べた写真家の人たちは、自分のフィルターを通してアンダーカバーのショーを表現できる人。あとは、パリで一緒に滞在して、生活して、感覚的に共感できる人。俺が撮ってほしいのはそういう写真家。まずは人としておもしろいか。今後、若い世代の写真家の人たちにもすごく興味はあるけど、個人的にどういう付き合いができて、おもしろいことをお互い吸い上げられるか、だね。

T：だからこそ、腹を割って話せるということですよね。

J：しかも記録してもらった4人には、音楽的であったり反逆的であったり、物作りをナチュラルボーン的に純粋に考えているという共通のポイントがある。

T：僕もいつのまにかアンダーカバーの撮影をやらせてもらっているけど、呼ばれた時はすごく嬉しかったです。

J：太郎と出会った当初の印象は、自分と育ってきた環境とかもまったく違うし、背景も違う感じだと思っていたけど、どこかでぐっと合う感覚があった。太郎は頭の中にあるカオスを作品で表現するときに、フラットに、静かに出すよね。

T：そうかもしれないですね。

J：俺の場合はもっと波があるけど、それをどうまとめていくか、バランスを取るかということに重点を置いている友達が周りにいて。太郎にしても、ノブさん(ヒステリックグラマーの北村信彦)もそうだし、龍平(俳優の松田龍平)や洋次郎(RADWIMPSの野田洋次郎)や5lack(ラッパー)、鉄也くん(アートディレクターの永戸鉄也)もモーリも、自分の中の混沌とした内面を、自分でどうプロデュースしてコントロールしていくかということがみんなすごく上手なわけ。それが俺にとっての判断基準というか。メジャーとマイナーとか、アンダーグラウンドとポップとか、それを関係なくバランスよくスッとリリースできる感覚を持っているのが、一番おもしろいところ。この本のタイトルにもなった“Chaos / Balance”は洋服のグラフィックでもよく使うけど、うちの言葉で表現するとそういうことになるし、それができる人じゃないといい作品はできないと思う。特に、俺が若い頃から影響を受けて、ヤバいと思った洋服とか音楽とか映画に対しては、カオスの部分がすごく強く見えて、それをうまくバランスを取っている人や物に影響を受けているということもあるけど。だから、俺がショーをやっていて一番楽しいのは、実はショーの本番じゃない。カオスの部分を通り抜けて、バランスを取った過程というか。東京での作業の時期は長すぎて、疲れたという感覚のほうが大きいんだけど、それを終えてパリに行って、4日間に凝縮してまとめる期間が、自分にとっては最高。

T：そう言われてすごく思うのは、パリにいる準備期間にジョニオさんがナーバスかといったら、全然そうじゃないですよね。むしろリラックスしていて、いつも僕が東京で見ているジョニオさんがそのままパリにいて。もちろん集中してバッと作業する瞬間もあるけど、どこか晴れ晴れしているというか。こういうマインドでショー前の最後の何日間を迎えるんだと思って。

J：そうなんだよ。だから、パリにいるときはめちゃくちゃ楽しい。特に、太郎が撮り始めたのは、よしえさんが撮った時期の後に震災があって、ショーも休止して、いろんな大変な時期を乗り越えて、やっとパリで再開できると思っていた1回目のショーだったから。その時に浅野(俳優の浅野忠信)が、「ロンドンにいるから観に行っていいですか？」って言ってパリに来てくれて、一緒に過ごして。東京で最初にショーを始めた時、まだ俳優でデビューして間もない浅野がショーに出てくれた頃からの友達だから、俺がパリでリスタートする時に浅野がいてくれたのはすごく嬉しかった。一緒にショー会場を見てからカフェに行った思い出とか、ショーには関係ないけど俺にとってはそういう一瞬一瞬の出来事がショーと同じぐらい印象に残っている。だから、ショー前の苦しいとかストイックという断片よりも、ショーを楽しんでいる、ということもこの本で見せたいなと。バックステージで作業していて、太郎に「タバコ吸いに行こうよ」っていうあの瞬間もすごく楽しみでさ。

T：そこでジョニオさんが「あれってどう思う？」とか聞いてくれて、自分なりに「あれよかったですよね」とか他愛もなく話したりしますしね。

J：俺にとっては、そういう人があの場にいてくれるとすごく楽になれる。しかも、その一言話した生の意見を踏まえて、さらに考えて写真を撮ってくれているだろうし。それは外部から入ってきた写真家の人には正直撮れないと思うから。

T: Yes, we are completely different (laughs).

J: That is because I always assign the role to a photographer who has his or her own perspective, both as a lensman and a friend. All the photographers I named before can depict UNDERCOVER shows through his or her own point of view. And the photographer has to be able to stay with my team in Paris, sharing in the sense of the experience. I want a photographer who possesses personal magnetism to shoot my shows. I'm also interested in collaborating with young photographers, but of great importance to me is how we can build a relationship and what kind of things we can create together.

T: If we get along well with each other, we can have a free and open discussion.

J: In addition, all of you are rebellious. You all love music and see creativity naturally and purely.

T: You know, I don't even remember when I began taking photos of UNDERCOVER. But I do remember that I was really glad when you asked me to do it.

J: When I met you for the first time, I felt like you were in another universe, since we come from different backgrounds. At some point, however, I felt that I could hit it off with you. You remain pretty calm while expressing the chaos in your head through your work, don't you?

T: I guess, yes.

J: I'm more temperamental, but I have friends who can balance such chaos. People like you, Nobu (Nobuhiko Kitamura from Hysteric Glamour), Ryuhei (Matsuda, actor), Yojiro (Noda from RADWIMPS), 5lack (Rapper), Tetsuya (Nagato, art director) and Mori are so good at both producing and controlling your inner chaos. I always choose photographers who have such a sense. What fascinates me is their ability to release chaos and to channel it into a fine balance, regardless of the genre and the type of medium they use. If I describe it in the words of my brand, it will be "Chaos / Balance", which is also used as the title of this book and graphics on UNDERCOVER clothes. Only photographers who have such an ability can make great work. Clothes, music, and film that have had great influence on me since my youth possess chaotic nature as well. I have always been influenced by people and things that keep a good balance within their inner chaos. So, for me, the most exciting part of a runway show is not its stage, but the process of achieving balance after going through chaos. The preparation process in Tokyo takes so long for me that I feel rather exhausted afterwards. But I love weaving everything into a show in only four days in Paris.

T: Your words remind me of the fact that you do not seem to be nervous at all while preparing a show in Paris. You look so relaxed and just the same as you normally are. Though there were times when you became concentrated in work, you looked refreshed there. Then I thought that you probably always spend the last few days before a show in that spirit.

J: Yeah, that's why I really enjoy staying in Paris. You actually began to take my backstage photos at just the right time. After Yoshie stopped shooting backstage there was the Tohoku earthquake, which prevented us from showing in Paris. We went through a difficult time, but finally we were able to come back to Paris and you were there. Also, Asano (Tadanobu Asano, actor) asked me if he could come see my first show in Paris after the earthquake, as he was staying in London then. He visited me there and we spent some time together. When I first started doing runway shows in Tokyo, Asano was also beginning his career. We have maintained a friendship since then, so I was really glad to have him staying with me when I restarted in Paris. I remember that he and I went to a café together after scouting a show's venue. Sometimes, such moments that have no relation to a show stand out in my mind as much as the show itself. So, what I would like to show people through this book is not only us being stressed or dedicated, but also us enjoying the show. While working backstage, I really enjoyed cigarette breaks with you.

T: There you asked me what I thought about some aspects of the show and I answered " I love it" or something like that. Just a chat, really.

J: I feel really comfortable if I have such intimacy with a photographer. And, after a chat, he or she might take photos with consideration for what I told them. To be honest, I don't think an outside photographer could do that job on the same level.

Chaos / Balance

Taro Mizutani
UNDERCOVER
a documentary from paris 2013-2015

First Edition 2017
Edition of 700

Photography: Taro Mizutani

Creative Direction: Jun Takahashi
Art Direction & Graphic Design : Tetsuya Nagato
Edit & Production, Text: Hiroshi Kagiyama

Translation to English: Aya Takatsu
English Text Edit: Eugene Rabkin

Special Thanks to:
Christine Mazza, Hiromi Otsuka, Katsuya Kamo, Michele Montagne,
Yoon, Yoshie Tominaga, Yoshio Wakatsuki, Tadanobu Asano,
Sylvie Gueguen, Ren Murata, Yasuyuki Takase

Thanks to the models and the model agencies:
Anna Martynova [Avant], Carly Moore, Lenka Varvarova [Elite], Mona Matsuoka [Image],
Sabine Cozijnsen [IMG], Lidia Judickaite [Marilyn], Madison Whittaker [MP Paris],
Nika Sykala [New Madison], Lera Tribel [Next], Nova Malanova, Pavlina Drozd [Supreme],
Anastasia Ivanova, Dasha Korchina, Nastya Kusakina, Sydney Wright, Yulia Labova [WOMEN]

Published by
UNDER COVER Co., Ltd
4-23-16 Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo 150-0001 Japan
www.undercoverism.com

Copyright © 2017 Taro Mizutani, UNDERCOVER

All right reserved. No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system,
or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording,
or otherwise, without prior consent of the publishers.

Printed and Bound in Japan